
蛮骨と霸道を歩む者たち

フィロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛮骨と霸道を歩む者たち

【Zコード】

Z6985Q

【作者名】

フイロ

【あらすじ】

七人隊の首領。蛮骨は犬夜叉に敗れた。だが、彼が目覚めた場所は仲間がいるあの世ではなく。遙か過去の三国志の世界だつた。
『犬夜叉』の蛮骨が『恋姫』の世界へ転移。因みに蛮骨は原作基準なので、蛮龍は妖刀ではありません。意見、感想など送ってくれると嬉しいです。

第1話「変わる世界」

「ん? 何処だ、此処は?」

そういうて、青年は仰向けになつていいた体を起こす。歳は十代中頃だろうか、幼さが残る野性味溢れる顔。腰まで届く三つ編み。額には十字の紋様を持った青年だ。周りは山と岩、地平線しかない荒涼とした荒野だった。

「俺は死んだ筈…………だよな?」

首を傾げながら、青年は自分の体を触る。何処にも死にいたる様な怪我は見受けられない。

「しかも、『丁寧に蛮龍までありやがる』

そういうて、彼の横に置いてあつた。身の丈よりも巨大な鉤を軽々と持ち上げる。

「さて、どうすりで、かなかな~」

そういうて、青年は蛮龍を肩に乗せ、空いた手で後頭部を搔ぐ。

「まあ、生きてりや、何とかなるだろ」

そういうて、青年は笑つ。どうやら、この青年かなり能天氣の様だ。

「おー、兄ちやん

「ん？」

青年は声の方に振り向く。そこには黄色の布で出来た服を着た三人組が立っていた。一人は小柄、一人は太った大柄、そして一人は二人の中間の様な男たちだ。彼等は似たような笑みを作りながら腰にある剣を青年に見えるようにチラつかせる。

「命が惜しかつたら有り金全部置いて行きやがれ」

その言葉に青年は恐怖よりも先に驚いた。なにせ、この青年。生まれてこの方、野盗に狙われたことなど無かつたのだ。

「へえ～、この蛮骨様に盗みを働くことなんて醉狂な奴らだな」

可笑しそうに笑い、蛮竜を一閃。それだけで中間の男より一步だけ前に出ていた巨漢と小柄の男が胴から上を空に舞い上がる。

「え？」

「あん？ 一人殺し損ねたか。運が良かつたな」

そういうて、蛮竜を肩に担ぎなおし、笑う。同時に男はその場を走り去る。青年、蛮骨はその後ろ姿をつまらなさそうに見る。その姿が見えなくなつてから蛮骨は近くにある岩に向かつて。

「おい、そこで隠れてる奴。三つ数えてやるからさつあと出てきな

そういうつた。そして徐に数を数え始めた。すると、岩から三つの人影が出てきた。

「まさか、バレテいたとは」

「驚きです」

「…………」

「お……女アツ！？」

出てきたのは三人の少女。一人は露出の激しい白い服に身を包んだ少女。一人はメガネを掛けた少女。一人は奇妙なオブジェを頭に乗せた少女。蛮骨はその三人の服装にも驚いたが、それ以上にこんな荒野に少女がいた事が驚きだった。

「いやはや、まさか野盗から助けようと思つていたら逆に撃退されるとは、その大鉾は伊達ではないということですかな？」

「ハツ、俺に助けなんかいらねえよ。あんな奴等千人いたつて敵じやねえ」

蛮骨の言葉に三人は少しだけ呆れた顔をする。どうやら千人、といつ言葉が誇張や虚勢の類だと思っているのだろう。

「まあ、此処で会つたのも何かの縁です。名前を窺つてもよろしいかな？」

「人に名を尋ねる時は自分から、つて親から教わってねえのか？」

少女の問いに蛮骨が逆に問う。

「む、確かにそれもそうですね。性は趙。名は雲。字は子龍と言います」

「趙雲？」

その名前に蛮骨が首を傾げる。何処となく聞き覚えがあつたり無かつたり。要領を得ないのでこの思考は彼方に送る事にした。

「性は郭。名は嘉。字は奉考と申します」

メガネを掛けた少女が素つ氣なく答える。

「性は程。名は？。字は仲徳です」

奇妙なオブジェを頭に乗せた少女が小さく呟いた。そして奇妙な自己紹介は蛮骨の番になった。だが、蛮骨は少し困ってしまう。何故なら彼の生まれ故郷では字という風習が無いのだ。しかも、蛮骨に性はない。少しだけ考え、ため息と共に蛮骨が口を開く。

「俺は蛮骨だ」

「ふむ、性は蛮。名は骨といつ事でいいのか？字は何と書つのです？」

「いや、俺の生まれた場所では字なんて言ひ物はねえ。それに蛮骨は名前だ。俺は性を持つてねえ」

蛮骨の言葉に三人が驚く。

「なんと、性がない？！それは本当ですか！？」

「ああ、性を持つ程、裕福な暮らしなんかしてねえからな」

「それに字がない地方なんて聞いた事ありません」

「変な人です」

最後の言葉は何処かおかしいが。三人が自己紹介を終えると、何かが、こちらに駆けて来る音が響いてきた。

「さて、名残惜しいですが私達はここから御暇しようと思ひます。あ、後の事はこっちにやつてくる人たちに聞けばいいと思ひので、頑張つて下さい」

そういうて、三人はそのまま、走り去つていった。それを眺めてため息を吐く。それから少しして蛮骨の前に馬に乗つた数人の男女がやって来る。

「華琳様。盜賊はコイツでしょつか?」

蒼と紫が混同している服を着た女性が先頭にいる少女に問い合わせる。

「いえ、報告では黄色の服を着た三人組の筈だわ」

「おう、テメエ等。ちょっとといいか?」

少し口調が荒いのは仕方ないがその言葉に過剰な反応を示す者がいた。

「貴様、華琳様になんて口を…そこに直れ……その首落とし
てやる！！！」

朱と紫が混同している服を着た少女が、青龍刀を抜き、構える。それを見た蛮骨は獣猛な笑みを見せ、蛮竜を構える。

「面白れえつ…………やつてみなつ…………」

青龍刀を構える女生と嘘の様に巨大な鉾を片手で持ち、薄ら笑いを浮かべている蛮骨。

「止めなさい…………」

そんな二人を先程華琳と呼ばれた少女の一喝が止める。女性は一瞬体を震わすと、直ぐに何故！？という様な視線を投げかける。蛮骨は先の一喝を聞いて、驚きながらも構えを崩さない。

「春蘭。勝手な行動は止めなさい。貴方、さつき言つた三人組に心当たりもあるの？」

聞かれ、蛮骨は蛮竜を肩に担いで。

「ああ？ 田でも悪いのか？ そこにはいるだろ？」

そういうて、蛮骨は後ろにある。屍を顎で指す。その死体に驚きの声を上げる数人の男達。

「確かもう一人居た筈だけど」

「ああ、逃げられたぜ」

「貴様！！！何故捕えなかつた！！！」

青龍刀を蛮骨に向けながら叫ぶ少女。それに面倒くさそうに頭を搔くと。

「なんで俺が捕まえなきゃいけねえんだよ。それに捕まえないと俺に不都合があるのかよ?」

貴様じやなくて華琳様に不都合があるのだ！！！！！」

「止めなさい、春蘭。彼の言い分は正しいわ。済まないわね、ええ」と

「蛮骨だ」

「蜜骨……ね。さうきは春蘭が勝手な真似をして悪かつたわ」

「別に。俺もこんな場所にいて退屈してたんだ。退屈しおなら何時でも相手してやっていいぜ?」

「何だと？」

「姉者。それと蛮骨殿も姉者を挑発しないでくれ」

未だに青龍刀を蛮骨に向けて来る女性を諫めている女性に言われ、
蛮骨は可笑しそうに笑みを作る。

「アーヴィー、お詫びとして近づく町まで送るナビ」

「そいつは助かる。」ちとら、右も左も分からなくて、困つてたんだ？」

「何を言つてゐる？ 右は箸を持つ方で。左は茶碗を持つ方だろ？」

「姉者。それとは意味が違つぞ」

キヨトンとした表情で答える女性にため息を吐いて頭を抑え、答える女性。それを見て、蛮骨は益々笑みを浮かべる。その後、少女は近くにいる男達に逃げた男を捜索するよつに命令した後、蛮骨を連れて近くの町へと向かつた。

「それで？ アンタ等は何者だ？」

「それは私の方が聞きたいわ。貴方は何者なのか。何故あの場所にいたのか。聞かせてくれない？」

少女の言葉に蛮骨は腕を組んで考える。未だに蛮骨自身も自分に起こつた事は理解できない。仕方ないので、自分に起こつた事は秘密にして話す事に決めた。

「俺は傭兵だ。んで、あの場所にいたのはなんつうか、成り行きだな」

「そう。どう思つ秋蘭？」

「嘘を言つてゐるのは思えません。それに傭兵というのも嘘ではないでしょ？。しかし、あれ程の巨大な鉾を使う傭兵なら名前くらい聞き及んでいる筈ですが」

「確かにやつね。春蘭でも、アレを軽々と扱えないよつだじ

「む~」

春蘭、と呼ばれた女性が唸る。町に着く前に念の為、と言われ蛮竜を渡せと言われたのだ。最初は断ろうと蛮骨は思つたが、町まで送つて貰つのだからそれくらいは許してやるか、と考えて蛮竜を渡したのだ。

「春蘭、といつより貴方の怪力がおかしいのよね。一体、その細腕にあの大鉾を持てる力があるのやら」

呆れたように少女が話す。春蘭といつ女性は蛮竜を持ち上げられなかつたのだ。それに驚いたもう一人の女性も手伝つたが、ビクともしない。それに驚き、仕方なく蛮竜を蛮骨に返したのだ。

「まあ、相棒は普通じゃないからな」

そういうて、豪快に笑つ蛮骨。それを少女は何かを決意したような顔をする。

「蛮骨。貴方、傭兵といったわね」

「ああ。なんだ、もしかして俺を雇いたいのか?」

「出来れば、正規兵として雇いたいんだけど。ダメかしら?」

「なつ!?.華琳様!...!んな素姓の分からぬ奴を雇つとは正気ですか?!.」

「私も姉者に賛成です。確かにかなりの使い手と見えますが

一人の女性の言葉に少女が頷く。

「だからこそよ。このまま、彼を野放しにして他の国。例えば『異』にでも雇われてみなさい。私達にとつてはそっちの方が危険よ。なら、多少危険でも懐に置いておく方が得策だわ」

「こざとこう時に直ぐに対処できるよ!」
か?

「ええ、どうかしら?」

その言葉に蛮骨は顔を俯かせて黙る。

「クツクツク」

低い、笑い声が聞こえる。見ると、蛮骨の身体が震えている。

「ハアーハツハツハツハー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

そして、顔を上げ、満面の笑みで笑い始める。こきなりの事で三人が驚き固まる。暫くの間、笑うと。蛮骨は田元に滲んだ涙を拭きながら。

「面白れえ。面白れえな、アンタ。いいぜ。今日からアンタが俺の雇い主だ」

そういうて、ニカツと笑う。

「そう、それはよかつたわ。じゃあ、先ずは給料の話だけど」

「そういうのはアンタ達で決めてくれ。衣食住を保証してくれるんじゃない、タダでも構わねえ」

「そりはいかないわ！……！」

こきなりの叫び声にキョトンとする蛮骨。

「兵に衣食住を保証するのは当然よ。それに、兵一人に給料を『え
ないなんて事が知れたら、この曹孟徳の名が泣くわ！……だから貴
方にも給料は払う」

そういうて、眞面目に給料の話を始める、少女に蛮骨は驚いて目
を見張っていた。そして楽しそうに笑う。どうやら、彼は少女を氣
に入つたようだ。それから少しだけ数字の話をした後。

「そりいえば、まだ自己紹介をしてなかつたわね」

少女の言葉に蛮骨も氣付く。そりいえばそつだと。ポンと手を叩
く。

「先ずは私からね。私は曹孟徳。いつちの短気なのは夏侯惇。いつ
ちが夏侯淵よ」

「ふんっ」

「よひじぐ

「あん？さつき夏侯惇が孟徳を別の名前で呼んでなかつたか？」

首を傾げる蛮骨。

「ああ、それは真名よ。貴方も持つているでしょ？」

「真名？なんだそれ。俺の名は蛮骨ただ一つだけだぜ」

蛮骨の言葉に三人が驚く。

「真名…………がない？」

「悪いけど、その真名つてのが、なんなのか分からんんだが」

「真名とこいつのは自分が心を許した相手にのみ、預け呼ぶ事を許す名だ」

夏侯淵が説明する。

「成る程な～。それなら蛮骨つてのが俺の真名になる」

「……つー？」

「な、なんとー？」

「むう……」

そういうて、三人がまた驚き、固まる。

「な、なら貴様は初対面の我々に、いきなり真名を呼ばせせる事を許していたと……そつひとつ事か」

「ん？ああ、そうなるな

何でもない風に蛮骨が答える。事実、それは蛮骨にとってなんでもないのだ。

「やつ……。なら、一いちらも貴方に真名を預けないと不公平でしょうね」

「別にいいぜ？名前が多いことこのがらがるからな」

そういって、頭を搔く。

「やつはいかないわ。蛮骨、私の事は華琳と呼んで良いわ

「へえ～い」

「貴様、華琳様に真名を呼んで貰う許可を貰つたのにその態度はなんだ！！！」

夏侯惇が叫ぶ。それを指で耳を塞いだ蛮骨が面倒くさそうに答える。

「別に雇い主に真名を呼んで貰つていい。とか言われても、嬉しくねえよ」

「何だとおー？」

「そこまでよ、春蘭。蛮骨、貴方が真名の意味をどう捉えているのかは知らないけれど、私達にとつて真名といつものほそれだけ重いところ事よ。それだけは覚えておいて」

「…………分かつたよ」

眞面目な顔で喋る華琳に蛮骨も觀念したよつて答える。

「華琳様が真名を許すのであれば我等も真名を教えねば不公平だな。
姉者？」

「べべつ～」

悔しそうに歯噛みする夏侯惇。

「私の事は秋蘭と呼んでくれ」

「…………春蘭だ」

「分かった。ま、」これから宜しくな

そういって、笑う。すると、思に出したよつて蠻骨は蠻骨は喋る。

「やうだ。一忠告だ」

「忠告？」

蛮骨は頷き。

「前に俺を雇つていた奴が。俺を恐れて討ち首にしておつとしたんだ

「それで？」

「俺は裏切りつてのが大嫌いでね。もし、アンタが前の雇い主と同じ事をしようとするなら」

突如蛮骨の表情がガラリと変わる。それはまるで鬼の様な表情。

「俺に殺されても文句は言えねえぜ?」

その迫力は凄まじく、三人が思わず息を呑む程。それに対しても華林は笑みを浮かべ。

「安心なさい。そんな事は絶対にしないわ」

虚勢ではなく、自信あふれる言葉だった。こうして、七人隊首領蛮骨と少女の曹操が出会った。これからどうなるのか、それは誰にも分からぬ。

第1話「変わる世界」（後書き）

どうも、フイロです。やつちやつたoren
前回（かなり前ですが）の小説を消した時に宣言したにもう撤回
してしまうとは。読者の皆様、申し訳ありません。

さて、何時までも後ろ向きな事言っているとどんどんブルーな気
持ちになるので切り替えます。今回は『犬夜叉』の蛮骨が『恋姫』
の世界に来て、曹操と出会う。というお話です。蛮骨はかなり気に
入っているキャラなので何時か出したいな」と思っていました。し
かし、クロスする作品をかなり悩みました。『ネギま』はもうやっ
たし。他にクロスする作品では蛮骨が浮いてしまう作品ばかりで悩
みました。結果、蛮骨が出ても、浮かない。パワーバランスが崩れ
ない作品という事で『恋姫』にしました。何故、曹操と組ませたの
かは単に曹操の軍に居た方が面白くなりそうだと思ったからです。
それに部下の三人娘と蛮骨の絡みもやりたかったですし。
では、次回更新でお会いしましょう

第2話「力試しと買い物」

「ああ、どうからでも掛かつて来な……！」

「ふん、その余裕いつまで持つかな？」

雲一つない晴天。蛮龍を構えた蛮骨と青龍刀『七星餓狼』を構えた春蘭が互いに睨み合っている。それを囮むようにして眺めている華林と秋蘭。そして兵士達。話は数分前に遡る。

「ああ？ 実を見せろだあ？」

「ええ、ここに来てから早二日。そろそろ体を動かさないと腕が鈍るでしょ？」

そう、華琳に言われ、蛮骨は壁に立てかけてある蛮龍を見る。

「まあ、確かにそうだけどよ。相手は誰にするんだ？」

「それなら、春蘭が快く引き受けてくれたわ」

その後、蛮龍を持った蛮骨を連れて、練兵場に向かい。そこには春蘭と向かい合って今に至る。

「ハアッ……！」

裂帛の気合と共に繰り出される春蘭の一撃を蛮骨は真っ向から蛮竜で受けた。

「おつと。へえ、中々力あるじゃねえか」

そういうつて、春蘭の一撃を弾く。

「んじゃ、次は俺の番だな」

片手で蛮龍を回転させながら蛮骨がそういう。

「オラアッ！！！」

叫ひと共に蠍龍が振るわれる

「ハアッ！！！！！」

春蘭もその一撃に渾身の一撃をぶつけた。瞬間、金属音が辺りに響く。

一
九
二
〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇

だが、拮抗も一瞬だけ、春蘭は蛮竜に押され、後ろに吹き飛ぶ。

「へえ、あの半妖野郎に比べりや、天地の差だろうが中々やるじやねえか」

そういうて、蛮龍を肩に担ぐ。

「これは予想外ね」

「ええ、かなりの使い手と思つていました。まさか、ここまでとは。正直味方でよかつたと思います」

二人の戦いを眺めながら春蘭の言葉に華林は頷く。春蘭は華林の軍でも一、一を争う程の将だ。それを相手に遊んでいる。これを脅威と呼ばず、何と言えばいいだろう。

「オオツ！……！」

「つとどー!?」

春蘭の一撃で蛮竜を弾かれる。蛮竜から手は離さなかつたが、大きくバランスが崩れた。

「貰つた！……！」

そこを見逃さず、仕掛ける春蘭。それを見た蛮骨は。

「フッ」

「つー？」

大鉾の柄にある半月状の刃を春蘭の首に突き付ける。

「……何故、止めた?」

「あん?これは力試しだろ?止め刺したら意味ねえだろ?が

そういうて、蛮竜を肩に担ぐ蛮骨。そして蛮骨は華林の方を向いて。

「これでいいだろ?」

「ええ。貴方の力は大体分かつたわ」

「大体……ね」

不敵な笑みで華林の言葉を呴くと、背中を向け、歩き出す。

「ま……待てつ！？」

「またやりたいんなら、俺の部屋に来な。何時でも相手になつてやるよ」

そういうて、蛮骨は背中越しに手を振りながら歩いて行く。それを春蘭は悔しそうに見つめている。

「さて、あれ程の力を持つているとなると。蛮骨の配置はどうします？」

「そうね。取り敢えず、最前線に出して様子を見ましょ。蛮骨の実力ならまず死ぬ事はない筈よ」

そういうて、秋蘭と華林は今後の軍備について話し始める。一方春蘭は余程、蛮骨に負けたのが悔しいのか、周囲にいる兵士たちと訓練をしていた。

そんな日の翌日。蛮骨が浴室でびりゅうって暇を潰そつか考へていると。

「蛮骨！……いるな……」

「それは入る前だと思つた、姉者

春蘭と秋蘭が入ってきた。

「何か用か?」

「用があるから来ているんだろう?」

「済まないが、少し手伝つて欲しい」

「言われ、蛮骨は一度いい暇潰しが出来た。と思い。一つ返事で了承した。」

「んで?なんで、俺が荷物持ちやつてんだ?」

「だから言つたろ?手伝つて欲しい」と

一人に着いて行き、町に向かうと一人から今日は買い物に来たのだと説明が入った。そして武具屋などの店を見て回り、何故か女性服専門店に連れて行かれ、周りの女性客の視線を浴びながら、二人の買い物に付き合い。両手に袋をこれでもか、と吊るして、先程の質問を投げかけたのだ。

「華琳様に似合う服があつて良かつたな、姉者」

「うむ、それに蛮骨も意外と使えるではないか。これなら後、二、三件梯子しても問題なさそうだ」

「そうだな」

蛮骨は一人の会話を聞き、嫌そうに顔を顰める。今すぐ、逃げた

い所だが昼飯を奢つてもうう、という約束をしているので逃げられない。しかも、一軒田でこの量なら帰る頃にはかなりの量になつている筈だ。

「安請け合いしちまつたなあ～」

ため息を吐きながら、これなら練兵場で自己鍛錬してた方が余程良い。

「蛇骨の野郎は、二三つの速いんだけどな～」

それ以前に蛇骨は服を買うよりも、服屋の荷台を襲うだろう。そう思つて、つい懐かしく思い、半分寂しくなる。もづ、蛇骨に会えないのだ。

「まあ、あの世に行つたら嫌でも会えるか

そういうて、蛮骨は笑う。すると、春蘭と秋蘭が新しい店を見付けたようで、蛮骨を呼んでいた。

「引き受けちまつたもんはしじうがねえ。最後までやるか」

結局、一、二件どころか一日掛けで二十件も回った。流石にそんな量の服を持つて歩かされた蛮骨は本氣で怒り、それに気を悪くしたのか秋蘭が自腹で夕飯を奢ってくれた。因みに春蘭は何故蛮骨が怒るのか分からず首を傾げていた所。秋蘭に言われ、買った服と共に先に城へ行かせた。

「つたく、散々だつたぜ」

「済まんな、本当に」

帰り道、蛮骨が漏らした愚痴に秋蘭が苦笑しながら謝る。それを見た蛮骨は少し自分も言い過ぎたか、と思い。

「もう、気にしてねえよ」

そういうて、そっぽを向く。それを見た秋蘭は少し驚いた表情を見せ、クスクスと笑う。

「なんだよ？」

「いや、お前もそんな顔をするのだな。と驚いた」

「悪いのかよ？」

「いや、悪くはない。ただ、意外だつたのだ。私は先程までお前の事を戦だけが生き甲斐な化け物の様な男だと思っていたからな」

そりりと酷い事を述べる秋蘭。その素直な感想に怒る氣を削がれた蛮骨は後頭部を搔きながら。

「否定はしねえさ。戦は楽しいからな。けど、俺だって人の子だ。人並みの楽しみくらい持つてる」

「例えば？」

顔を下から覗きこまれ、聞かれる。蛮骨はそれに数秒考えて。

「酒に食い物。後は博打だな」

「意外と少ないな。書物を読んだりしないのか？」

秋蘭に聞かれる。すると、蛮骨は顔を背ける。

「どうした？」

「…………めねえんだ」

「ん？」

「字が読めねえんだよ！……！……悪いか！？」

そう叫び、再びそっぽを向く。気のせいが、頬が赤い。

「ブ、ククク、アツハハハハハハハハハツ！……！」

秋蘭がいきなり腹を抱えて笑い始めた。それを聞き、更に頬を染める蛮骨。次第に恥辱は殺意に変わり始め、頭を握りつぶしてやろうかと、蛮骨が本気で考え始めると。秋蘭が喋り始める。

「そうか、そうか。意外と姉者と似通っているのだな。お前は」

「ハアッ？！俺の何処があの猪女と似ているんだよ」

「姉者もな。文字の読み書きが得意ではないのだ」

そういうて、滲んだ涙を指で拭ぐ。

「そうか、字が読めないか。しかし、それは問題だな」

「あ？ なんでだよ？」

秋蘭は咳払いを一つすると、人差し指を立て。

「将たるもの、最低限の文字は読み書き出来た方が良い。お前も何となく分かるだろ？」

「…………まあな」

そうこうして、蛮骨は頷く。

「ふむ、やうだな。どうだ？ 蛮骨、私に文字を書いてみないか？」

「ヤダ。面倒だし、面白くねえ」

子供の様に駄々をこねる蛮骨。秋蘭は少し考え。

「では、夕飯を奢りや。これでどうだ？」

その言葉に蛮骨が反応する。もつ一押しか、と考えて。

「もし、読み書きが出来るようになったら、また一つ姉者に白痴であるや？」

春蘭を引き合って出すのは気が引けるが、蛮骨をおちよぐる事が出来るのだ。仕方がない。と考え提案する。

「チツ、夕飯の約束忘れんじゃねえぞ？」

そうじって、勝手に歩き出す。エリザベス、アーヴィング、「承したようだ。秋蘭は小さく握り拳を作る。

「それじゃ、今夜……は無理だから明日の夕方からにするか

「なんで夕方からなんだ？朝からやりやいいだろ？」

蛮骨の言葉に秋蘭が苦笑する。

「私にもお前にも予定、という物があるだろ？」「

そう言われ、そいえば、と納得する蛮骨。さて、これは楽しみだ、と思わず笑ってしまう秋蘭。

「これは中々の収穫だな」

「ん？なんか言ったか？」

「やるからには厳しくする。と言ったんだ」

その言葉に蛮骨が一瞬嫌そうな顔をしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

第2話「力試しと買い物」（後書き）

どうも、フイロです。さて、今回は蛮骨の力試しと春蘭、秋蘭の買い物。そして秋蘭に字を教えて貰う、という事です。これはオリジナルですが。蛮骨が活躍していた時代。つまり、戦国時代は多くの人間が読み書きが出来ない時代であり、原作でも代筆を煉骨に頼んでいたことから、蛮骨は字が書けない、読めないと勝手に考えました。気に入つてもらえたでしょうか？では、次回の更新をお楽しみに

第3話「賊討伐」

蛮骨が華林に雇われ、秋蘭に文字を習い始めてから数日が経つたある日。

「蛮骨！……！」

練兵場を見渡せる丘で昼寝をしていた蛮骨に秋蘭が叫び起こす。

「なんだよ。何か用か？」

田を擦りながら、蛮骨が起き上がる。

「華琳様からの伝言だ。監督官から糧食の帳簿を貰つて来て欲しい
そうだ」

「んなの、お前がやれよ」

「これでも、私は忙しいんだ。伝えに来てやつただけありがたいと思え」

腕を組んで答える秋蘭に蛮骨は大きく欠伸をして。

「俺も忙しいんだよ」

「昼寝か？」

蛮骨がしつかりと頷く。秋蘭はため息を吐く。

「やつれど行つて來い。監督官は今、馬具の確認をしてくる筈だ」

やつれど、蛮骨に背を向けて歩き出す。それを背中越しに見た
蛮骨は頭をガリガリと搔いた後、立ち上がり蛮龍を肩に担ぐと馬具
が置いてある方に歩き出す。そして肝心な事を思い出す。

「あの監督官のはどんな奴なんだ？」

唸りながら蛮骨は歩く。すると、何時の間にか馬具が置いてある
場所に着いた。そこには小柄な少女が立っていた。丁度良いので蛮
骨はその少女に聞く事にした。

「おー、アンタ。聞きたい事があんだけど」

「.....」

無視である。その反応に少しだけ機嫌を悪くするも、周りにいる
兵士達の声に遮られたのだらう、と考えもつ一度声を掛ける事にし
た。

「おー、アンタ!!」

「.....」

無視である。因みに寝起きの蛮骨は通常時より、沸点が低かつた
りする。蛮骨は一度深呼吸して。

「おー、ナビッ-----聞いてんのかつ-----」

練兵場に響き渡る程の怒声で叫ぶ。それを聞いた周りの兵士達が蛮骨を見るが、鬼の様な顔をしている蛮骨を見ると、すぐに自分の作業に戻る。触らぬ神に何とやら、である。そしてその怒声を間近で聞いた、動物の耳のような頭巾を頭に被っている少女が驚いたよう震えた後、ゆっくりと振り向く。少し涙目なのは仕方ない事だ。

「チビとは何よ。チビとは…………」

「ハツ……チビをチビと言つて何が悪いんだよ。それよりも、ここに監督官がいる筈だが、知ってるか」

「や、それなら私よ」

少女の言葉に蛮骨はキョトンとする。

「何だつて?」

「だから、私が監督官よ…………」

大声で叫ぶ少女。そして数秒を開け、蛮骨が笑い始める。しかも、
大声で。

「な、なによ。こきなり」

突然の言葉に動搖する少女。

「お前が、監督官? ガキが笑わせんな

そういうて、目元に滲んだ涙を拭ぐ。少女はかなり頭に来たのか
顔が真っ赤だ。

「つたぐ、俺は早く帳簿貰つて華林の所に行かなきやいけねえんだよ」

「な、なんでアンタが曹操さまの真名を呼んでいるのよー?」

蛮骨の言葉に少女が驚いている。

「蛮骨!…………帳簿を貰つて来るのに一体どれだけ掛かるの?」

そこに件の華林がやってきた。

「おお、華琳。そういうやあ、なんでこんな慌ただしいんだ?」

「全く、軍議で話したでしょ? 賊の討伐に出でます」

「華琳様、蛮骨はさつきまで毎晩をしていて軍議に出ていません」

華林の呆れた言葉に秋蘭が苦笑しながら答える。

「へえ~、賊ねえ~。おい、こりゃ。総大将が来ちまつたじゃねえか」

「か、華琳様。これが帳簿です…………」

蛮骨の言葉を無視して少女が華林に帳簿を渡す。そこで蛮骨もようやく、少女が嘘を付いていない事に気付く。そして秋蘭に近づくと、小声で。

「おい、ひり秋蘭。テメエ、なんで監督官がガキだと言わなかつたんだ?」

「悪い。壇のを忘れていた。私も忙しかったんだ」
そういうて、手を合わせて謝つて来る秋蘭にこれ以上怒る気が失せた蛮骨が鼻を鳴らして黙る。

「あの、曹操さま。お聞きして宜しいでしょうか？」

「何かしら？」

「何故、あの様な野蛮な男が此処にいるのですか？」

少女は視線を華林に定めたまま、指で蛮骨のいる位置を正確に指す。一瞬、頭から股までかち割つてやううかと考えたが、秋蘭に止められる。

「何故つて、私が雇つたからよ。中々の腕前の様だしね

「そんつー？こんな下品といつて言葉すら綺麗に思えて来るほどの男をですか！？」

酷い言われ様である。どうやら、この少女は男が大嫌いな様だ。

「あら？ 貴方は監督官の分際で私に意見するの？」

「つー？ 出過ぎた真似をしました。お許しください」

華林の言葉に少女が謝る。

「それより貴女。どうこうつもつかしら？ 糧食の調達。指定した半

分しか準備できていらないんだけど

静かだが、怒りを含んだ声音で華林が少女に問う。

「あん？」

「へ？」

その言葉に春蘭と蛮骨の疑問の声が重なる。秋蘭も声には出れないが、険しい顔つきになつている。

「Iのまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになるところだつたわ。そつなつたら、貴女はどう責任を取るつもり？」

その言葉に少女は即答する。

「いえ、やつはならない筈です」

「何？…………どうこう事かしら」

答えが速かつたのが意外なのか、少し驚いた様だ。少女は華林の様子を少し見つめた後、口を開く。

「理由は三つあります。御聞き頂けますか？」

「…………説明なさい。納得のいく理由なら、許してあげましょ？」

「はつ。御納得頂けなければ、それは私の不能の致す所。この場で我が首、刎ねて頂いても結構にござります」

その言葉に乗せられた覚悟に蛮骨は内心で驚嘆する。次いで、少しだけこの少女に興味を抱いた。隣で静かに佇んでいる秋蘭に声を掛ける。

「あのチビ。名前は？」

「確か、筈？だつたな。惚れたか？」

秋蘭の言葉に蛮骨が嫌そうな顔をする。

「誰があんなチビに惚れるか。少し興味が出ただけだ。テメエだつてそつだろ？」

蛮骨の言葉に秋蘭も頷く。

「その言葉、一言はないぞ？」

「はっ。では、説明をさせていただきます」

筈？の二つの理由は簡単に纏めると次のよつたな物だ。

1：曹操は慎重な性格故、糧食の最終確認は必ず自身で行つ筈。そこで問題があれば、責任者を呼ぶ筈だから、絶対に行き倒れにはならない

2：糧食が少なくなれば身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がる（食糧は荷車に積んでおり、その数が減れば、確かに移動速度は上がる）。よつて、討伐全体に掛かる時間は、大幅に短縮する。

3：自身の提案する作戦を探れば、戦闘時間を大幅に短くする事が

出来る。よつて、最初に自分が用意した糧食で十分だと判断した。

説明中、何度か春蘭が怒鳴りそうになつたり、華林のこめかみがヒクついたりする中、蛮骨はその少女に対する評価を上げていた。やり方は結構強引だが、中々やり手の様だ。

「曹操さま……どうかこの筈？めを、曹操さまを勝利に導く軍師として、配下にお加え下さこませーー！」

「へえ」

蛮骨が面白そうに笑みを浮かべる。

「どうかーどうかー、曹操さまーー！」

悲壯な叫びが響いた後、静かに華林が口を開く。

「…………筈？。貴女の真名は？」

「桂花[ハナ]ヤウイーます」

即答である。

「桂花。貴女……」の曹操を試したわね？」

笑みを浮かべた華林の言葉に筈？は。

「はい」

強く頷き、答える。

「な……つ……貴様、何をいひしゃあしゃあと……。華琳とも……」
「……」のよつた無礼な輩、即刻首を刎ねてしまつましょつ……」

怒声を上げる春蘭。蛮骨は面倒そつにため息を吐くと、蛮龍を一閃、春蘭の目の前にある地面に叩きつける。ズンッ、といつ音と共に地面が簡単に砕ける。

「つ……？」

「少し待てよ、春蘭。わついう決定は全部華林が下すんだろつ……部下が勝手やつて、華林の評価が下がつたら、お前も困るだつ……」

「ぐつ……それは……」

春蘭が押し黙る。蛮骨は蛮龍を肩に担ぎなおす。

「何故、姉者を抑えた？」

「別に、退屈しのぎにほんとうにからな。」そのまま、見守る事にしてたんだよ」

蛮骨の言葉に秋蘭が呆れる。再び、華林が口を開く。

「桂花。軍師としての経験は？」

「はつ。」に来るまでは、南皮で軍師をしておりました

「…………わづ」

一瞬、華林の表情が険しくなった。

「秋蘭、南皮つて所に華林は嫌な思い出でもあるのか？」

「そう言つ訳ではない。南皮は袁紹の本拠地だ。袁紹といつのは、華琳さまとは昔からの腐れ縁でな……」

「成る程」

二人の会話を尻目に、華林と筈？の会話は続く。

「どうせアレの事だから、軍師の言葉などに耳を貸さなかつたでしょ。それに嫌気が差して、この辺りまで流れて来たのかしら？」

「……まさか、聞かぬ相手に説く事は軍師の腕の見せ所。まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るう事、何を惜しみ、躊躇いましょう」

「……ならばその力、私の為に振るう事は惜しまないと？」

「一目見た瞬間、私の全てを捧げる御方と確信しました。もし御不用とあれば、この筈？、生きてこの場を去る気はありません。遠慮なくこの場で御斬り捨て下せ……！」

その言葉に華林はジッと筈？を見つめる。そして華林は徐に春蘭を呼び、春蘭は華林に大鎌を渡す。蛮童より小さいものの。少女が振るうには大きすぎる物だ。だが、華林はソレを手足の様に扱い、刃を筈？の首筋に突き付ける。

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試さ

れるところ」と。……分かつていてるかしりっ。」

「まつ。ナレにあえて試させていただきました」

「せつ。……なりば、じひする事も貴女の掌の上と書つ事よね……」

せついた瞬間、華林は振りあげた刃を振り下ろす。

「…………」

静寂 箕?はその場に跪いたまま、首は落とされなかつた。

「…………」「…………」

「なんだ、殺さねえのか?」

呆然とする春蘭と秋蘭を尻目に蛮骨が意外そつに問い合わせる。その間に答える様に華林が喋る。

「当然でしょ。……けれど桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、どうするつもりだった?」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそれ、恨むことなどございません」

「……嘘は嫌いよ。本当の事を言ひなさい」

呆れながら華林が口を開く。

「曹操さまの」氣性からして、試されたなら、必ず試し返すに違い

ないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした。それに私は軍師であつて武官ではありません。あの状態から曹操さまの一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

גַּעֲמָנִים

そういうて、華林は筈？に突き付けていた大鎌を下ろす。

華林が楽しそうに笑う。それは以前、蛮骨を雇つた時に見せた蛮骨の笑いと同種のモノ。

「最高よ、桂花。私を一度も試す度胸とその知謀、気に入つたわ。
貴女の才、私の天下を取る為に存分に使わせて貰う事にする。いい
わね？」

「はつ……！」

正に感極まつた表情で返事をする筈？。

「ならまずは、この討伐行を成功させてみなさい。糧食は半分で良いと言つたのだから……もし不足したならその失態、身をもつて償つてもいいわよ？」

御意！

それから筈？はまるで人が変わった様に兵士達に指示を出していく。

「蛮骨」

「なんだ？」

そんな中、華林が蛮骨に話しかける。

「桂花だけど、貴方はどう思つて居るの？」

「…………いけ好かねえ。小生意氣なチビだ。ま、実力があるようだから、特に言う事はねえ」

「そう、正直なのね」

そういうて、クスクスと華林は笑う。そして、華林は真剣な表情をする。

「私は天下を取る。今回の討伐行はその為の踏み台に過ぎないわ」

「ふうん」

華林の言葉に青空を眺めながら、蛮骨は素つ気なく答える。蛮骨にとつて雇い主の思想、主義なんかはどうでもいいのだ。否、そもそも蛮骨はこれから待ち受ける戦のみにしか興味がない。

「確かに桂花を手に入れたのは私にとつては大きいわ。後は」

「俺が使えるかどうか。だろ?」

そういうて、蛮骨は視線を空から華林に移す。華林は不敵な笑みを浮かべ。

「ええ。春蘭に勝つたのは偶然じゃない事を祈つているわ」

そういうて、華林は春蘭たちの方に向かつた。それから少しして行軍が開始する。

「さて、俺も給料分は働くかね」

そういうて、蛮骨は用意された馬に飛び乗る。

「ほう。馬には乗れるのか？」つきりその鉢のせいで徒步だと思つていたのだが

何時の間にか隣にいた秋蘭が問いかける。

「舐めんなよ。これでも乗馬は人並みに出来らあ」

そういうて、笑う。秋蘭もフツと笑みを浮かべる。

「さて、お前にとつては雇われての初陣だが。まさか、緊張しているとは言わないな？」

「別に何時も通りだよ。突っ込んで敵を殺す。何時もと同じだ」

「やつぱり、見た目と同じで野蛮ね」

呆れた様な声に振り向くと、そこには何時の間にか桂花がいた。

「なんだ、いたのか。小走過ぎて見えなかつたぜ」

「へへ、大きいからって偉そうに

「別に、俺はタダの傭兵だからな。これでも敬意は払っているんだぜ？なあ、小さい軍師様？」

「蛮骨。それは敬意じゃなくて挑発だ」

秋蘭の呆れに蛮骨は楽しそうに笑う。

「それで、華琳さまはどうだったのだ？」

秋蘭の言葉に桂花は一転して恋する乙女の顔になる。何処となく犬夜叉を想う蛇骨を連想させる。

「思つた通り、素晴らしいお方だつたわ……。あのお方こそ、私が命を懸けてお仕えするに相応しいお方だわ！－！」

「ま、仕えても損はないって思わせる所はあるからな」

「……ふつ。貴女の様な野蛮人でも華琳さまの魅力が分かるなんて。やはり素晴らしい方だわ」

あまりのモノ言いにそろそろ蛮骨も本氣で殴りたくなるが、流石に自分の力で殴つては桂花が死にそうなので我慢した。代わりに。

「おつとむ

「つーっキヤアー！？」

ワザとらしく、蛮骨を桂花が乗つている馬の前に落とす。いきな

りの事に馬が驚き、桂花が落ちる。

「いや～、悪い悪い。手が滑っちゃった」

馬から下りて蛮龍を肩に担ぐ蛮骨。

「や、気を付けなさいよーーー！」

そういうて、ギャアギャア騒ぐ桂花を無視して蛮骨は自分の馬に跨る。その表情は悪戯が成功した悪ガキの顔だつた。

「全く」

ため息と共に秋蘭が呆れる。

「おお、貴様等、こんな所にいたか」

すると、前方から春蘭がやつてきた。

「どうした、姉者。急ぎか？」

秋蘭の問いに春蘭は頷く。

「うむ。前方に何やら大人數の集団がいるらしい。華琳さまがお呼びだ。すぐに来い」

「分かったわーー！」

華琳、といつ言葉にいち早く反応した桂花。

「それと、蛮骨。お前も来い」

「了解。やあつと、身体が動かせるぜ」

それから四人は急いで華林がいる天幕に向かつた。

「遅くなりました」

「丁度偵察が帰つて来た所よ。報告を」

偵察の報告によると。行軍中の集団は数十人程。旗がなく、服装もバラバラな所を見ると、野盗の可能性が高いといつ。

「さて、どうしようか

「もう一度、偵察隊を出しましょ。夏侯惇、蛮骨、あなた達が指揮を執つて

「おひ

「蛮骨、姉者の抑え役。頼んだぞ」

「分かった

秋蘭の言葉に蛮骨が頷く。

「おい、それではまるで私が敵と見ればすぐ突撃するようではないか……！」

「違うの？」

「違わないでしょっ？」

「うう、華琳さままで～」

春蘭が情けない顔になる。それを苦笑しながら見ている秋蘭。

「それよりも、姉者。速く行かないと蛮骨に置いてかれやが？」

「なに？」

春蘭が振り向くと、蛮骨は数人の兵士を連れて、先に行ってしまつている。

「あ、こら待てえ～！！！」

慌てて、春蘭が蛮骨を追いかける。しばらく進んでくると。

「夏侯導さま……蛮骨殿……見えました」

「御苦労」

「あれか？にしては騒がしいな」

集団は一か所に集まり、なにやら騒いでいる。

「何かと戦つてこるのか？って、蛮骨……またもや先に行くな！

！」

蛮骨が馬を走らせる。すると、春蘭の言葉通り、集団は何かと戦

つっていた。ただ、変なのは集団から時節、何かが空を飛んでいるのだ。それを見た蛮骨は馬を止め、降りる。そこに飛んできた何かがドシャツと落ちる。

「コイツは」

「人だな」

春蘭も追い付き、ソレを見る。蛮骨は楽しそうに笑みを作ると、集団に向かつて突撃した。

「はあ…………はあ…………はあ…………。もう、こんなにたくさん……
…多過ぎるよ!…………」

少女は巨大な鉄球に寄りかかって荒い息をしている。かなり体力を消耗している様だ。

「オラアツ…………」

そこに蛮骨が叫びと共にやってきた。同時に蛮骨の近くにいた人々は悉く、下半身と上半身を泣き別れにされ、地面を赤く塗らす。

「え?」

「小さな子供に寄つてたかって、貴様等覚悟は出来ているな…………」

少女が戸惑つも、後からやつてきた春蘭の言葉に遮られる。そして蛮骨と春蘭による虐殺劇が始まつた。

「ヒィツ…………化け物だ…………」

ようやく、自分達の置かれた状況が分かつたのか、野盗が逃げ始める。

「お前ら、後を付けて来い。春蘭、それ以上やる必要ねえぞ?」

「何故だ?今の内に敵の戦力を削いだ方がいいだろ?」

春蘭の言葉に蛮骨が呆れる。

「それよりも、敵の本拠地を見付けて、一網打尽にするやいいだろうが」

「む、それもそうか。おおい、誰か」

「もひつ、偵察は出したよ。バアカ」

そういって、蛮骨は蛮龍を振つて刃に付いた血を飛ばす。

「あ……あの」

「おお、怪我はないか?少女よ」

「はいっ。ありがとうございます!おかけで助かりました」

少女は元気一杯に答える。これが先程、兵士を数人纏めて吹き飛ばしていたのだから、信じられない。

「それは何よりだ。しかし、何故こんな所で一人戦っていたのだ?」

春蘭の問いは尤もだ。

「はい、それは…………」

少女がそんな話をしようとするといふと、華林達がやつてきた。

「蛮骨。謎の集団はどうしたの？ 戦闘をしたのは見れば分かるけど」「そいつ等なら逃げたよ。今、何人かに尾行させてるから本拠地はすぐに分かるだろ」

「あら、気が利くわね」

華林の言葉に蛮骨は鼻を鳴らす。すると、少女の様子が変わっているのに気付く。

「あ、あなた…………！」

「ん？ この子は？」

華林が問いかける。春蘭が答える前に少女が口を開く。

「お姉さん、もしかして、國の軍隊…………っ……？」

「まあ、そうなるが…………ぐつーっ！」

「へえ～」

瞬間、少女が鉄球を振り下ろす。ソレを春蘭が弾く。蛮骨はソレを面白そうに見つめる。

「き、貴様、何をつ……」

「国の軍隊なんか信用出来るもんか！――ボク達を守つてもくれない
クセに税金ばかり持つていつて……やああああああああっ――
！」

叫びと共に鉄球が襲いかかる。

「……ぐうつ……」

春蘭が辛くも弾く。そして弾かれた鉄球は蛮骨に向かう。

「蛮骨つ？！」

「ん？」

向かつて来る鉄球を見て、蛮骨はやれやれ、といった風にため息
を吐くと。その鉄球を正面から受け止める。ズンッ、と言づ音と共に
鉄球が止まる。

「どうにも、話が分からねえが。軍隊が信用できねえからテメエは
一人で戦つていたのか？」

「そうだよ。ボクは村で一番強いから、ボクが皆を守らなきゃいけ
ないんだつ――盗人からも、お前達……役人からもつ――」

そう言いながら、鎖を握るつとするも、鉄球を握んでいる蛮骨の
怪力に敵わないのか、苦しい顔になる。

「俺は別に役人じゃねえんだがな。で、華林。ビーツある?」

「…………」

華林は無言。蛮骨はソレを見て面白くなさそうに鼻を鳴らすと。鉄球を思いつきり引く。

「えつ？ うわつ？！」

こきなりの事に少女のバランスが崩れる。

「ありがとう蛮骨。もういいわ」

そういうて、華林は少女の前に立つ。

「貴女、名は？」

拒否を許さぬ言葉と気迫に少女は身を堅くする。

「や……許緒と言こまゆ」

オズオズと少女、許緒が答える。

「そり…………」

田を伏せた華林は。

「許緒、じめんなさい」

「…………え？」

許緒に頭を下げる事だった。

「曹操、 もう……？」

「何と……」

桂花の信じられない、といった声。春蘭の驚いた声が聞こえる。

「あ、あの……っ……！」

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向いの陳留の町で刺史をしてこられる者よ」

「山向いの……？あ……それじゃつーへー、『めんなさい……！』

「な……？」

少女が謝る。それに驚いた春蘭。

「山向いの街の噂は聞いてます……！向いの刺史さまはすぐ立派な人で、悪い事はしないし、税金も安くなったり、盗賊も少なくなつたつて！そんなん人に、ボク……ボク……！……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、刺史の私が一番よく知っているも。官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ

「で、でも……」

申し訳なさそうに顔を伏せる。

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え……？ボクの、力を……？」

許緒が顔を上げる。そこには堂々と華林が微笑んでいる。

「私はいざれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。だから……村の皆を守る為に振るつたあなたの力と勇氣。この私に貸して欲しい」

「曹操さまが、王にな……？」

確かめるよつに聞く許緒。

「ええ」

「あ……あの……。曹操さまが王様になつたら……ボク達の村も守つてくれますか？盗賊も、やつつけてくれますか？」

「約束するわ。貴女達の村だけじゃなく、この大陸の人々が安心して暮らせるように。その為にも私は王になるの」

「この大陸の皆が……安心して……暮らしせる」

すると、桂花が華林に近づく。

「曹操さま、偵察の兵が戻りました！——盗賊団の本拠地は、すぐそ

「です……」

「判つたわ。……ねえ、許緒」

「は、はこつ……」

「まあ、貴女の村を脅かす盜賊団を根絶やしつづけるわ。まあそこだけでいい、貴女の力を貸してくれるかしつづく？」

華林の言葉に許緒は笑顔で頷き。

「はい……それなら、いぐりでも……。」

その言葉に華林は笑みを浮かべる。

「ふふっ、ありがと……。春蘭、秋蘭。許緒はひとまず、貴女達の下に付ける。分からぬことは教えてあげなさい」

「はい」

「了解です……」

「あ、あの……夏侯惇、れせん」

許緒が春蘭に近づく。春蘭は笑って。

「ああ、せつその事なら気にせんで良い。蛮骨も仮にしていない様だからな」

「蛮骨、つてやつさボクの鉄球を受け止めたお兄ちゃん？」

「ああ、やうだ。後で挨拶しちゃるといこう」

春蘭の言葉に許緒は頷く。

「……では、総員、行軍を再開するわー！騎乗……」

その言葉と共に兵士達は馬に乗り、進み始める。

「わて、俺も行くかね」

「あ、あの蛮骨、わん」

蛮骨も馬に乗りつとすると、許緒が話しかけてきた。

「えっと、わざわざその…………」

「別に気にしちゃこねえよ。それと、わざわざ止める。慣れてねえんだ」

「えっと、じやあ。蛮骨兄ちやんひて呼んどもこいですか？」

許緒の提案に蛮骨は少し考える。確かに蛮骨は元々『七人隊』の奴等から『大兄貴』と呼ばれていたのだがお兄ちやん、というのは初めてだ。

「ま、いいだね。んじゃ、これから宜しくな、許緒

「はーっ……」

そして蛮骨は自分の馬に騎乗して、移動を開始する。

第3話「賊討伐」（後書き）

次回は蛮骨無双です。お楽しみにーーーーー

第4話「蛮骨の初仕事」

盗賊を尾行していた兵が見付けた本拠地の砦は、山の影に隠れるように建てられていた。彼らの本拠地は華林達が許緒と出会った場所から意外と近い場所にあった。だが、深く入り組んでいる為に、余程入念に探さなければ、決して見つかる事はないだろう。無論、砦の大きさは見つかり難さ重視する為か、かなり小さめだ。

「許緒。この辺りに他の盗賊は潜伏しているの？」

「いえ、ここにはアイツ等しかいませんから、曹操さまが探している盗賊団も恐らく……」

華林が彼女の答えに満足そうに頷く。そして秋蘭に問いかける。

「秋蘭、敵の数は把握出来ているの？」

「はっ、およそ二三十との報告がありました」

「そいつは豪勢だな」

「全く、あんな小さじ砦に、どうやって二三十も入るのか……」

春蘭の言葉を背中に聞きながら、蛮骨は目の前に見える砦を見つめる。何やら、後ろで策を話し合っている様だが、今の蛮骨には届かない。

「ねえ、蛮骨兄ちゃん」

「ん? ビビした?」

何時の間にか、許緒が隣におり、緊張した顔で立っている。

「あんまり、緊張しなくてもお前の出番はねえよ。流石にあのチビでもいきなり突撃しろ、なんて無謀な事しないだろ」

「う、うん。そうだ、ボクを呼ぶ時は真名。季衣って呼んで、春蘭様と秋蘭様も真名で呼んで良いって言つてたから」

そういうて、笑う季衣。

「おひつ」

蛮骨も笑つて、季衣の頭を撫でる。

「さて、これで策は決まったわ

華林がそういうと、立ち上がる。蛮骨も立ち上がる。

「で?俺はどうすればいい?」

その言葉に秋蘭と華林が呆れ、春蘭と桂花が怒る。作戦を聞いてなかつた蛮骨に秋蘭が簡単に説明する。

「先ず、私と姉者の部隊が皆の後方に待機し、華琳さま、季衣、桂花と蛮骨が少數の兵で正面に立ち、銅鑼を鳴らして敵を誘き出す。そして私達が後ろから敵を叩く。と言つ事だ。分かったか」

「了解。はあ、俺はチビのお守りか」

「あら、不服？でも、安心なさい。突撃してきた兵士の相手は全て貴方に任せせるから」

その言葉に周りの兵士達が動搖する。それを聞いた蛮骨は嬉しそうに口元を歪める。

「成る程な。それなら別にいいぜ」

「じゃあ、決まりね。総員出撃……！」

先ず、春蘭と秋蘭の部隊が先行して動き、その後、華林達が動く。

「お～、近くで見ると中々壮观だな～」

「まったく、緊張感ないわね。それよりも突撃していく敵の対応しつかりやんなさいよ」

「わあつてゐよ」

「あの、蛮骨兄ちゃん。やつぱり、ボクも手伝つた方が」

季衣の言葉を蛮骨は頭を撫でる事で遮る。

「安心しな。これでも俺は強えからな。それよりも季衣、お前はしつかり、そここのチビと総大将を守りな。それがお前の仕事だ」

「うん。でも、無理しないでね」

「ちよっと、なんで私はチビでその子は真名なの…？」

「はいはい、そこまでそろそろ始めましょ」

華林に言われ、桂花は渋々と銅鑼を鳴らす様に指示する。そして辺りに銅鑼が鳴り響く。それに呼応するように皆から咆哮が轟く。

「…………桂花」

「…………はー」

「めかみを押さえている華林が桂花に尋ねる。

「これも貴女の作戦の内かしら?」

「いえ、これは流石に予想外です」

ガックリと桂花が頑垂れる。蛮骨は楽しそうに笑っている。

「アイツ等、銅鑼の音を出撃の合図だと思つてやがる」

「ハア…………そうみたいね。単純な連中つてどうしていい

すると、前方を睨んでいた季衣が叫ぶ。

「華琳さまーー。蛮骨兄ちゃん!ーー!敵の軍勢突っ込んできたよーー!」

「ようやくか

言葉と共に蛮骨が一步前に出る。

「多少のズレはあつたけど、」ひらは予定通りに行動するわ。総員、一回退くわよ。畜生、全滅させる勢いでやつなさい……！」

華林の言葉と共に盜賊の集団から矢が飛んでくる。蛮骨は蛮竜を振りかぶり。

「んなもん」

振り抜く。

「言わぬくても、やつてやうが……」

突風が巻き起こり、飛んできた矢が全て明後日の方向に落ちる。

「凄い……！」

その光景に思わず、目を奪われる華林だが、すぐさま他の兵士に指示を出す。

۱۷۰

蛮骨はニイツと笑い。走りだす。

「一仕事といふかあつ。」

叫び、蛮骨は敵に突つ込むと蛮竜を横に薙ぎ払う。それだけで、数人が絶命し、地面に転がる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！－！－！－！－！－！」

蛮竜を片手で回転させ、周りの敵を切り刻む。そして蛮竜を振り下ろしながら突っ込む。

「ハツ！……！」

横から付いてきた槍を紙一重で避け、蛮竜の柄で、その槍を持つた敵の首を刎ねる。次いで近くにいた敵の頭を掴み、自分の前に持つてくる。同時に申し合わせたように掴んだ兵士の体に槍と矢が突き刺さる。

「御苦労さん」

そう、咳き。掴んでいた賊の頭を握りつぶし、蛮竜を振るう。背後に向かって肘を突き出すと、後ろで斬りかかるうとしていた敵の顔面を捕え、吹き飛ばす。

「どうしたあ！……！」

叫び、突撃する。蛮竜で薙ぎ、拳を振るう。それだけで目の前の敵は死んでいく。次いで、その場から飛び上がる。同時に蛮骨がいた位置に四方八方から槍が飛びだし、それぞれの槍を持った敵が味方の槍に刺される。蛮骨は蛮竜を投げる。蛮竜はそのまま、敵陣に突っ込み、数人を薙ぎ払う。蛮骨は地面に着地すると同時に駆けだし、蛮竜の元に向かう。その最中、邪魔する敵の首を掴み、そのまま、振り回す。そして既に絶命している敵を投げ、蛮竜を掴み、円を描くように振る。そして蛮骨は蛮竜を肩に乗せ、つまらなさそうに鼻を鳴らす。

「歯応えがねえな」

そう呟くと、近くにいた敵の首をへし折る。そのまま、敵を投げる。それを避けられずに受け止めてしまった敵を蛮竜の巨大な刃が襲い、首を飛ばす。同時に、蛮竜で地面を抉り飛ばす。大地の破片は敵にぶつかり、無残な姿で地面に転がる。そのまま、蛮骨は敵の中に飛びこみ、蛮竜を振る。

「ハアアアアアアアアアアアアツ！！！！！」

そこに春蘭率いる夏侯惇隊が突っ込んだ。

「無事…………の様だな。後は我等に任せろ」

「ハツ、生憎。やりかけの仕事を放つたらかす程、落ちぶれちゃいねえ！！！！！」

叫びと共に春蘭に飛びかかった賊を蛮竜で分断する。空中で一につにされた賊は下にいる春蘭と蛮骨に血の雨を浴びせる。

「なら、遅れるなよ？」

「誰に言つてんだよ」

言葉と共に春蘭と蛮骨は、弾かれた様に敵陣に突つ込み、数を減らしていく。そこに華林達が戻つて残りの賊を全て掃討した。

「華琳さま御無事でしたか

「御苦労さま、秋蘭。見事な働きだつたわ」

「お褒めに『』り、光栄の極みです」

戦闘が始まり、数時間が経過し
つた。敵は全て絶命しており、大地に屍を晒していた。盗賊は逃げ
る間もなく、殺されたのだ。しかも、大地に転がっている屍の半数
以上が蛮骨一人でやつたのだ。

「桂花、見事な作戦だつたわ。負傷者も殆どいないし。上出来よ」

「あ、ありがとうございます…… ッ……」

華林の言葉に桂花は嬉しそうに答える。

「そついえば、蛮骨は何処?」

華林が周りを見ながら聞く。

「蛮骨なら返り血を流すといつて、近くの川に向かいました」

「呼んだか?」

秋蘭の説明の最中。蛮骨が戻ってきた。そして周辺の警戒をして
いた春蘭と季衣も集まって來た。

「春蘭。貴女もよくやつたわ」

「はっ……ありがとうございます……」

春蘭は心底嬉しそうに答える。蛮骨は近くの岩に腰掛け、蛮龍の
手入れを始める。

「それと、蛮骨」

「ん?」

視線だけ、動かし華林を見る。

「あれ程の武勇。見事としか言えないわ」

上機嫌に蛮骨を褒める華林。蛮骨はそれを聞きながら蛮童の手入れをする。

「そいつは良かつた。けど次はもう少し、歯応えのある奴等と戦いたいんだがな~」

「安心なさい。そんな心配しなくとも、時期が来れば貴方が満足する戦が出来るわ」

そういうて、華林が笑う。蛮骨も嬉しそうに笑みを返す。その後、華林達は陳留に戻る事となつた。そして四日が過ぎ、陳留が田と鼻の先といつ所で秋蘭が呴く。

「盗賊達は撃破し、奴等の城を落としたが……肝心の古書は見つからなかつたな」

その言葉に蛮骨は華林達がある古書を探してくるのを思い出す。その道程で蛮骨と出会つたのだ。

「つむ、非常に無念だ。一体何処にあるやう『大変用心の書』は……

「 「 「 ハア …… 」 」

春蘭の言葉に華林、秋蘭、桂花がため息を吐く。

「 …… 春蘭。正しくは『太平要術』よ」

「えつ…………？あつ……」

自分の間違いに気付いたのか、春蘭が狼狽する。視線を合わせると逸らすか、ため息を吐かれる状況で無反応だった蛮骨と季衣に春蘭は縋るように言つた。

「なあ、一人とも！…言つたよな？私、そう言つたよな？」

「あん？」

「あう、『めんなさい』ちょっとお話してて、聞いてなかつたです」

季衣は陳留にどんなお店があるか蛮骨に聞いており、蛮骨もそれに答えており、全く今の会話は聞いてなかつたのだ。それを聞いた春蘭はガックリと落ち込む。そして隣にいる秋蘭に慰められる。

「まあ、今回は桂花と季衣という貴重な人材が入つたからよしとしましよう。蛮骨の力も見れたしね」

「はいっ！…これからも宜しくお願ひします。曹操さま…！」

嬉しそうに季衣が答える。何故、季衣が華林の軍にいるのか。それは季衣が住んでいた地域を治める役人が盜賊に恐れをなして、逃

げ出し。その地域を華林が治める事になつたのだ。更に今回の武功を認められ、季衣は華林の親衛隊を任せられる事になつたのだ。これで喜ぶな、といつ方が無理である。

「後は桂花だけ…………」

「はい…………」

名を呼ばれ、身を堅くする桂花。

「もうすぐ城に着くのだけれど…………私、今とてもお腹が減つているの」

「…………はい」

そつ、十分だと言つた糧食が底を尽きたのだ。それが昨夜の事。

「ですが曹操さま。一つだけ言わせて頂ければ、それはこの季衣が

…………」

「はい」

突然、名を呼ばれ首を傾げる季衣。糧食が底を尽きた原因は季衣にあるのだ。別に彼女が食糧を台無しにした。と言つてではない。食べるのだ、こんな小さな体の何処に入るのか、と思ひへりに。その量、実に十人分。

「予想外の事など戦場では当然よ？それを言い訳にするのは適切な予測が出来ない、無能者のする事だと思つけど？」

「流石に俺も人の十倍飯食う奴なんて予想出来ないけどな」

「なに？ 蛮骨何か言つた？」

ギラシ、と華林の目が光り、蛮骨を睨んだように見えたが、蛮骨は目を逸らす。

「えつと……ボク、何か悪い事をしたんですか？」

「いや、季衣は別に何も悪くない。気にするな」

不安そうに顔を曇らせる季衣を立ち直った春蘭が慰める。

「どんな約束でも、反故にする事は私の信用に関わる。少なくとも、無かつた事にする事は出来ないわね」

「…………分かりました。最後の糧食の管理が出来なかつたのは、私の不始末。首を刎ねるなり、思つままにして下さいませ」

場に重い空気が広がる。それを華林の吐息が破る。

「とはいえ、今回の遠征の功績無視できないのもまた事実。…………良いわ、死刑は減刑して、お仕置きだけで許してあげる」

「あ、曹操さま…………ツー！」

「お優しい総大将様だな」

嬉しそうな表情になつた桂花だが、蛮骨の嫌味にムツとする。華林はそれを微笑みながら。

「あら、多大な功績を無視して、無下に殺しては後に損害を被るかもしれないのよ？それなら多少の失敗には目を瞑る方が賢明じゃない？」

「ふうん」

蛮骨は興味無さそうに前を見る。

「それから季衣と共に、私を真名で呼ぶ事を許します。より一層、奮起して仕える様に！――！」

「あ、ありがとうございます………本当にありがとうございます！曹操さまっ……！」

「ふふつ。なら城に戻つたら、私の部屋に来なさい。たっぷり……私が可愛がつてあげるわ」

華林がそういつた瞬間、春蘭と秋蘭の間にただならぬ雰囲気が満ちて行く。一人は不満げながら、羨ましそうに桂花を見つめる。そこで蛮骨は今までの違和感に気がついた。華林が誰かに似ていると思つていたのだ。

「そつか、華林は蛇骨の女版か」

何処となく、一緒にいて安心する、といふか何時も通り振舞えるのはそのせいの様だ。

「ん？ 隠どうしたの？」

「ああ、気にはすんな。季衣には一生、関係ねえ」

一生、と言つ所を強くする蛮骨。願わくば、この無垢な少女が第一の華林にならない事を祈りながら。

これから、気に入つた女を華林に取られるかもな。そんな事を考え、少しだけ憂鬱になる蛮骨だった。

第4話「蛮骨の初仕事」（後書き）

いつも、フィロです。今回は蛮骨無双。ちょっと物足りないかな、と思いましたが、作者の力量的にこれが精一杯。御容赦ください。

第5話「竹力ゴ、いらんかね？」

「で？ なんで俺がお前らのお守りをしなきゃいけないんだ？」

「あら、暇なんじよ？ なんせ、仕事を抜け出して、そこの茶屋で呑気に茶を啜つていたんだから」

「チツ」

そういうて、蛮骨は忌々しそうに舌打ちする。別に蛮骨は仕事をサボつたわけでなく。自分の仕事を近くにいた兵士に丸投げしだけである。まあ、十分迷惑な話だが。そして街でのんびりしていると、華林、春蘭、秋蘭と出くわし、街の視察に付き合え、と言われたのだ。仕方なく、蛮骨は三人に付き合う事にしたのだ。面倒だが、暇よりかはマシなのだ。何故なら、季衣は近くで盜賊団の根城が見つかり、その討伐に向かつたので今はいない。桂花は念のため、城にいるので暇なのだ。

「はい！ それでは次の一曲、聞いて頂きましょう……」

「姉さん、伴奏お願いね」

「うん！ ……任せておいて」

すると、旅芸人の一曲の中で一際異彩を放つ集団を見付けた。三人の少女達が歌を歌っている。蛮骨が聞いた事の無い歌だ。

「また旅芸人か。珍しいな」

「そりゃ?まあ、確かにここ最近増えたけどな」

秋蘭の言葉に蛮骨が答える。彼女達が歌つてゐる歌は南方の歌らしい。南方は盜賊達が多く、そこから旅芸人はあまり来ないので。だが、それらがここに來てゐるのは間違ひなく以前の賊討伐が原因だろう。

「あれが南方の歌ね」

「蛮骨……？」

蛮骨は徐に三人組の所に歩き始める。

「ありがとう」「やったー!!」

蛮骨は三人の前に立つと懐から財布を出す。すると。

男の叫びの方を向くと、一人の男の子が腕一杯に果実を抱えて走っていた。

「え？ キヤアッ！？」

その子供は蛮骨の前、丁度桃色の長髪を黄色いリボンで結んだ少女にぶつかる。そしてぶつかった少女はバランスを崩して倒れる。

「おうど」

蛮骨は咄嗟に少女を倒れない様に抱える。

「つと、大丈夫か？」

「え？ は、はい」

蛮骨は返事を聞くと、少女を立たせる。そして蛮骨は近くで果実を拾い集めている子供の首根っこを掴んで自分の顔まで引き上げる。

「おひ、ガキ。盗みなんてセコイ真似してんじゃねえよ」

「う、うみせえ。離せよ。」**「十字」**

子供の言葉に眉を引くつかせる蛮骨。すると、子供を追つて来たのか店主がやつてきた。

「おお、蛮骨さん。済まねえ、危づく子供こまかれる所だったよ」

「つたぐ、そろそろ歳なんだから後継ぎ位用意しておけよ。親父」

蛮骨の言葉に店主が頭を搔いて苦笑にする。

「後は俺に任せな。後、その果物一つくれるか」

「へい、毎度どうも」

ちうじつて、蛮骨は子供を持ったまま、器用に財布から代金を店主に渡す。そうじて子供を下ろす。すると、子供は蛮骨を睨んで。

「へつ……施しなんかいらねえ……」

「へえ、ガキの癖に難しい言葉知つてんだな。けど、勘違いしてるのは?
俺は別に『メヘ』にやる為にコレを買ったわけじゃねえ。コレは
俺が食つ為に買つたんだよ」

そういうて、手に持つた果物に齧り付く。それを見た子供が悔しそうに顔を歪める。それを見た蛮骨は面白そうに笑つて。

「ハン、悔しかつたら。俺を見返してみな。ま、盗みをやる様なガキじや、無理だろ?がな」

そういうて、快活に笑う。すると、子供は田元に涙を滲ませながら、蛮骨に指を突き付ける。

「なら、盗みなんて止めてやる。そんで、大きくなつて絶対にお前を見返してやる!……!」

子供はそういうて、走り去る。それを見た蛮骨は嬉しそうに笑うと、先程の少女の方に近づく。

「おひ、怪我はないか?」

「は、はい……さつきはあります……」

桃色の少女は頬を赤くして蛮骨に頭を下げる。

「さつきの歌、面白かったぜ。少ないけど持つて行きな。頑張れよ

「はい!……ありがとうございます!」

少女の感謝の言葉を受けながら、蛮骨は華林の所に戻る。す

ると、三人は信じられない、といった表情をしている。

「どうした？」

「驚いたわ。貴方、結構顔が広いのね」

「蛮骨を知つてゐる様で、知らなかつたのだな。我々は

「それよりも、蛮骨。さつきの子供の対応はなんだつ……お前には優しさと『う物はないのか……』

春蘭の非難の言葉に蛮骨は何でもなさそうに果物を齧る。

「ああこいつのは、アレでいいんだよ」

「どうじつ意味だ？」

春蘭の言葉に蛮骨は何でもない風に答える。

「あのガキは俺が知つてる限りじゃ、アレが初めての盜みだ。それならあれくらいで見逃してもいい。それにまだ戻れる

「戻るってなんにだ？」

春蘭の言葉に蛮骨が呆れてため息を吐く。

「まだ、此處で商ひしてゐる奴等みてえに真つ当な人間に戻れるつて意味だよ。ああやつて、俺を見返してやるつて思わせれば、もう盗みはしねえからな。アイツ自身がそう言つたし」

そういうて、話は終わりだと、言わんばかりにスタスターと歩き出す。

「まつたく、それでも他にやつよつはあるだろ？」

「それが蛮骨なりのやり方なのだろ。流石に子供には酷だと想つが」

「まあ、蛮骨なりの愛情表現、なのかしらね」

「さういって、華林が笑う。遠くで蛮骨が呼ぶ声が聞こえる。

「さて、蛮骨が律儀に待っているのだからさつせと行きましょう」

そういうて、華林は歩き出す。それに春蘭と秋蘭がついて行く。一方、先程蛮骨に助けられた少女はその蛮骨の背中を見ていた。その視線の意味を蛮骨は知らない。

「さて……これから街を視察するのだけれど、狭くはないし、時間もないわ。手分けしてやりましょう」

華林の提案に春蘭と秋蘭が頷く。蛮骨はどうでもよそばこのんびりと空を見上げている。

「春蘭は街の右手側、秋蘭は左手側をお願い。私は中央を見て回るわ

「華琳さま。蛮骨はどうするんです？」

「何もないなら帰つていいか?」

「駄目。蛮骨には私の護衛役として一緒に来て貰うわ」

華林の言葉を聞いた春蘭が羨ましそうに蛮骨を見る。蛮骨はため息を吐いて。

「つたく、仕方ねえな」

そういうて、四人は別れる。

華林と蛮骨が担当する中央部は、真ん中を走る大通りと、そこに並ぶ市場が特徴だ。だが、華林は大通りではなく、小さな店や住宅が集まる裏通りだった。彼女曰く「大きなところの意見は黙つていても集まる物」と言う事。しかし、蛮骨はあまりここに来たくはなかった。何故なら。

「あ、蛮骨の大兄貴だ！！！！！」

「本当だ！！！大兄貴～」

一人の子供が蛮骨に気付くと、次々と子供たちが蛮骨に群がる。それに面倒そうにため息を吐く蛮骨。

「大兄貴～。今日はどうしたの～？」

「おお、煩い上司のお守りだ」

「ねえ、大兄貴～。また抱っこしてえ～」

「仕方ねえな」

等と言いながら、蛮骨は子供の相手をしていく。それを驚いた表情で華林は見つめる。それに気付いた蛮骨は子供を肩車しながら近づく。

「どうした、華林？」

「いえ、驚いてるのよ。まさか、ここまで顔が広いなんて」

「まあ、暇があれば街に来てるからな。 いてて、顔引つ張んなよ」

そういうって、肩車している子供を注意する。そしていきなり泣き始める子供をあやす蛮骨。その姿は面倒見のいいお兄さんだ。子供たちが親しみを込めて「大兄貴」と呼んでいるのも頷ける。ふと華林はあることに気付く。

「ねえ、蛮骨。 ここの子達の親は？」

そう、子供たちの親がいないのだ。子供達をあやしてるのは蛮骨と少し成長した少年、少女たちなのだ。

「いねえよ」

「え？」

そう答えた蛮骨。周りの少年や少女も暗い表情をしている。

「ここにいるガキ共は皆、親に捨てられたか、親が死んだかのどっちかだ。だから誰かが世話しねえと、死んじまつ」

そういうながら、子供の頭を撫でる蛮骨。

「何処行つても、こんな場所はありやがる」

「そうね…………」

蛮骨の言葉に華林が顔を伏せる。責任を感じている様だ。それを見た蛮骨はため息を吐いて。

「つたく、なんでテメエがそんな顔するんだよ。そんな事に気を取られるなんなら、この国をもつと良くする事だけ考えろ」

蛮骨は華林を真っ直ぐ見つめ、そういった。

「そうね。そんな事、貴方に言われなくとも分かっているつもりだつたけど。ありがとう、蛮骨」

華林は顔を上げ、素直に蛮骨に礼を言った。すると、蛮骨は視線を逸らし、頬を指で搔く。

「ハン、別に礼を言われる事じゃねえよ」

「大兄貴、照れてる?」

「ホントだあ、大あにき赤い」

「バツ！？照れてねえ！！！！！」

そういうて、蛮骨が怒るが、子供たちは面白がって蛮骨をからかう。華林はそれを見て、クスクスと笑っている。

「なあ、大兄貴。あの人つて大兄貴の好い人？」

一人の少年が蛮骨に聞いた。

「あん？」

蛮骨は華林を見て。

「んな訳あるかよ。あんなガキみたいな女なんて氣にも留めねえよ」

「んなつー？」

「あんまりといえど、あんまりである。流石に華林も額に青筋が出ている。」

「ちよっと、蛮骨。それどういつ意味？」

「決まつてんだろ。俺はガキには興味ねえんだよ。そうだな、遊び相手にならなつてもいいぜ？何がいい？お手玉か、それともあや取りか？」

笑いながら、蛮骨が喋る。華林は表情をどんどん怒りに変えていくが、ふと自分達が何をしに来たのか気付き、表情を変える。

「まあ、いいわ。ほら、蛮骨。視察の続きをするわよ」

「ええ～、大兄貴。行っちゃうの～」

「また来てやるから。安心しろ」

そういうて、蛮骨は華林の所に急ぐ。

「それにしても、驚いたわ。まさか、あんなに子供達に慕われてるなんて」

「まあ、迷子になつてたガキを助けてそれからズルズルとつてそんな感じだ」

そういうて、あの子供たちの世話をしている内に懐かれ、今では彼等を尋ねるのが日課になつていて。それを楽しそうに聞いている華林。ふと、一人の先に露天商があつた。その一角、かなり刺激的な格好をした少女が一際大きな声で、見に来る客を呼んでいる。

「は～いつ～！寄つてらっしゃい見てらっしゃ～い～～！」

少女が営む露天商の近くに寄ると、そこには竹力ゴが沢山並べられていた。中々良く出来た作りの様だが、あまり売れ行きは好調ではないらしい。すると、竹力ゴの他に奇妙な物体が置いてあつた。

「あら、何コレ？」

華林がそういうて近づく。

「おお、そこの人～～～！御田が高い～～～！コイツはウチが開発した、全自動力ゴ編み機装置や～～～！」

「へえ～、コイツは大したもんだ」

蛮骨も興味があるのか、真剣な表情で眺める。すると、少女は恥ずかしそうに顔を赤らめて。

「あの、お兄さん？ウチの胸やなくて、そいつの装置に興味持つてくれなんか？」

そう、蛮骨は少女が作った装置ではなく、少女の胸を見ていたのだ。それはもう、熱心に。まるで何処ぞの女好きな法師の様に。

「蛮骨。貴方ね～」

「仕方ねえだろ？ ああまで、全開にせれたら男として見るのは当然だ」

そういうと、華林は少し考え。

「なら、私や桂花が同じ恰好しても見るの？」

...
[REDACTED]

「ちよつと…………答えなさいよ…………」

「で？」の装置、全自動って言つてるけど。実際どうなんだ？」

「あ、それですか？」

「いや……無視するな……！」

華林の言葉を無視する蛮骨は少女の説明を聞く。

「ええですか? この絡繹の底に、竹を細う切つた材料をぐるぐると一周に突つ込んでなあ……この取つ手をグルグルっと回しますね

ん。するとなあ……

何時の間にか華林も少女の説明を聞いていた。そんな一人が注目する中、怪しい機械にセットされた竹が中へとゆっくり吸い込まれていく。暫くすると、機械の上から編み上げられた力ゴの側面がゆっくりと迫り出してきた。中々良く出来た作りに一人が感嘆の声を上げる。

「どうですかあ～」いつやつて、竹力ゴの周りが簡単に編めるんよ」

いろんな場所でも絡繆が普及している。まあ、流石に銀骨並の絡繆装備は出て来ないか、などと蛮骨が考えていると、華林が少女に話しかける。

「確かに良くなっているけど……底と枠の部分はどうあるの？」

「あ、そこは手動です」

即答である。蛮骨が笑みを作る。このいつ真つ正直なのは好ましい様だ。

「全自动じゃねえな。これじゃ」

「あつ～、お兄さん、ツツ「ハハ」厳しいな～。そこは雰囲氣で頼みますわ」

少女は苦笑して答える。どうやら、その辺は認めてるらしい。といつより、取っ手は何時まで回すのだらつか？すると、全自动力ゴ編み装置から徐々に煙が噴き出してきた。

「なんか、煙噴いてるぞ?」

「へっ?あ、アカン!!御一方、離れ」

少女の言葉を遮り、カゴ編み装置が爆発した。それを唖然として表情で見ている蛮骨と華林。そして爆発のお陰でやや黒ずんだ顔の少女は悔しそうに言った。

「あ~……やつぱダメやつたか~」

朗らかに笑う少女。蛮骨は髪に引っ掛けた歯車を取り、放り投げ。

「で?なんで、爆発したんだ?」

「まだこれ、試作品なんよ。普通に作ると竹のしなりに強度が追い付かんでなあ……結構調節したつもりなんやけど、爆発してもうたかあ」

「なんで未完成品を置いとくの?」

呆れた風に華林が呟く。

「いや~……田立つかなあ~って」

「いや、嬢ちゃんの格好だけで結構田立つと思ひぞ」

腕を組んで何度も頷きながら答える蛮骨。それを華林が軽く睨む。どうやら、先程の質問が尾を引いている様だ。

「やつですか？そやつたらお兄さん」

「ん？」

蛮骨が少女を見る。少女は笑顔で竹力ゴを持ち上げて。

「竹力ゴいりません？」

その言葉を聞いた蛮骨が楽しそうに笑う。

「面白いな、お前。いいぜ。丁度それくらいのカゴが欲しかったんだ。一つ買ってやるよ」

「まいど～」

少女の元気良い声を聞きながら、カゴを抱えた蛮骨は上機嫌に歩き出す。それを不思議そうに華林が見ている。

「それ、何に使うの？」

「ガキ共の土産を入れるカゴが欲しかったからな。丁度いいぜ」

そういうて、カラカラと楽しそうに蛮骨が笑う。それを見て、華林も納得したように頷く。あまり、街の視察は出来なかつたが、蛮骨の珍しい一面を見れただけでも良しとしよ。

その後、約束の場所で華林と蛮骨が待つていて、春蘭と秋蘭がやってきた。蛮骨の持つているカゴと作りが同じカゴを持つて。

「どうしてみんな、お揃いの竹カゴを持っているの？」

華林が徐に口を開くと。

「…………私は今朝、部屋のカゴの底が抜けているのに気付きまして。直そうとしたのですが、どうにも上手く出来ずに」

「成る程、春蘭は？カゴの中には服が入っているけど」

「ハツ！…季衣への土産です」

秋蘭が苦笑しながら答えるのに対しても春蘭も素直に答えてくる。ただ、心なしか春蘭の顔に汗が見える様な気がするも、蛮骨は興味が無いので無視する。

「そり、土産もいいけど、程々にしなさいね？」

「ハツ！…次からは程々にします！…！」

何処となく嬉しそうに答える。本当に解つてゐるのか？否、絶対に分かつていない。

「で？何故、蛮骨は竹カゴを持っていますの？」

「うむ、確かにそうだな。何故だ、蛮骨？」

春蘭と秋蘭が蛮骨に言葉を投げる。

「ああ、これが？これはな「大あにきー！…」「あん？」

「「大兄貴？」」「

蛮骨が説明する前に男の子が一人、駆けてきた。

「どうした?」「だい

「あのね、『らんま』と『りょうが』がまた喧嘩したんだ」

「アイツ等も懲りねえな~」

そういうて、頭を搔く。

「華林、預かっててくれ」

「いいけど、喧嘩の仲裁?」

「まあ、そんな所だ」

そういうて、『だい』といつ男の子を抱えて蛮骨は走り出す。
それをポカンと見ている春蘭と秋蘭が華林を見る。

「まあ、城に戻りながら話しましょ?その方が効率がいいわ」

そういうて、華林が歩き出す。春蘭と秋蘭もそれに続く。

第5話「竹かご、いらんかね？」（後書き）

いつも、フィロです。今回はちょっと蛮骨のオリジナルな設定です。なんとなく、蛮骨は面倒見が良く、子供たちと普通に戯れてそういう感じになりました。気に入つていただけたでしょうか？そしてラストに話が出てきた三人のキャラ。元ネタは分かりますよね？では、次回も御期待下さい

第6話「予言」

「そこの若いの」

子供たちの喧嘩を仲裁した後、華林達の所に戻ろうとした蛮骨を呼び止めたのは頭から布を被り、性別が判別できない人物だった。ただ、その枯れた声から老人だというのは何となく分かつた。

「俺の事か？」

「そうじゃ、若いの」

蛮骨の問いに間髪入れずに答える老人。蛮骨は少しだけ警戒する。

「血と墓土の臭いを漂わせているお主じゃ」

その言葉を聞き、蛮骨は驚く。何故、この老人は自分が死人だと知っているのだ？確かに蛮骨は死んだ後、半妖『奈落』によつて『四魂の玉』の欠片を首に埋め込まれ、生き返つた。そして『白靈山』で犬夜叉と闘い敗れた後、この地にやつて來た（今の蛮骨は死人ではなく、ちゃんと生きた人間だが）。勿論この地に蛮骨の出自を知つてゐる者はいない。筈なのにこの老人は蛮骨の事を知つてゐる。

「テメエ、まさか奈落の仲間か？」

少し、声を小さくして問う。

「奈落？はて、ワシは知らんな。ワシは単にお主がどんな人間か、観ただけじゃ」

「あん？ 視ただ？ 訳分かんねえよ」

老人の言葉の意味が分からず、困惑する蛮骨。

「ワシは単なる占い師。主から不吉な相が視えてな。話しかけただけに過ぎん」

「そうかい。けどな、俺あ、占いは信じねえタチなんだよ」

そういうて、蛮骨は老人に背を向ける。

「『蛇』を探しなされ」

その言葉に蛮骨が立ち止まり、顔だけ振り向く。

「お主の行く先に大いなる手助けをしてくれる『蛇』を探しなされ

「蛇だと？」

「そうじや」

そういうて、老人は去っていく。それを見た蛮骨は鼻を鳴らすと、歩き出す。

?

その後、華林達の許に戻ると、何故だか春蘭と桂花が凄く不機嫌な顔をしていた。それを不思議に思いながら、秋蘭に近づく。

「なあ、あの二人、何があつたんだ？」

「ん？ ああ、お前と別れた後、占い師にあつてな。華琳様の事を『奸雄』になると言つたのだ」

秋蘭の説明を聞いた蛮骨。『奸雄』という言葉は分からぬが、二人が不機嫌になる理由なのだろう。

「ん？ その占い師って頭から布被つてる奴か？」

「そうだが、お前も会つたのか？」

「ああ、何でも『蛇』を探せ、とか訳分かんない事を言いやがったな。まあ、蛇なんてそこら辺にわんさかいるから探す必要もねえがな」

そういうて、快活に笑う蛮骨。

「お前らしいな。しかし『蛇』か、意味深だな。他に何か言つてなかつたか？」

「別に。それだけ言つてさつさと行つちまつたよ」

そういうて、誤魔化す。流石に自分が死人だつたといつのは隠した方がいいだろ？。

?

場所は変わつて、街のとある宿で三人の少女が話をしていた。彼女達は昼間、歌で客を賑わせていた旅芸人であつた。実は彼女達は姉妹であり、大きな夢を持つて大陸中を旅しているのだ。

「…………はあ。今日の実入りも今一つだつたわね」

メガネを掛けた、三女の人和。彼女は三人の纏め役だ。

「…………こんな調子で、大陸一の旅芸人になれるのかなあ。どう思う、姉さん。…………姉さん？」

蒼髪の次女、地和が長女である桃色の長髪が特徴であり姉妹一番の胸を持つた天和に問いを投げるも、答えが返つて来ず、不思議に思い、天和を見ると。

「はあ～…………」

頬を染め、うつとりとした表情で窓から見える月を眺めていた。それを確認した一人は深くため息を吐く。天和は昼過ぎからこんな様子である。

「原因は…………多分、十字の人だよね？」

「そうね。姉さん、男の人にあんな事されたの初めてだらうし」

十字の男、昼に果実を盗んだ子供に天和が突き飛ばされ、それを助けた蛮骨の事である。どうやら、天和は蛮骨に心奪われた。そう妹二人は考えている。

「名前は……蛮骨さん、だけ？」

「うん、確かやう。まあ、姉さんは放つといつてこれから的事を考えましょ」

「うん。けど、その前に少し外の空気吸つて来るね」

そういうて、地和は部屋を出る。

「うーん、夜風が気持ち～」

満点の星空の下、地和が大きく体を伸ばす。

「あ、あのっ！……張三姉妹の、張宝さんですよね？」

「へ？ はい、そういうですけど。どちら様？」

口髭を生やした中年の男性が話しかけてきた。それに少しだけ警戒する地和。男は恥ずかしそうに喋る。

「俺、貴女達の歌。大好きなんです。これからも頑張って下さい」

「え？ あ、ありがとうございます！」

地和は少し呆気に取られながらもお礼を言つ。そして男は思い出

したように懐から何か取り出した。

「『』、これ良かつたら貰つて下さい……この本、貴重な物らしいんで、売つたらお金になると思います。活動資金の足しにでもしてください」

渡された本は妙に古く、埃が被つてしまつてゐる。

「いいんですか？」

「勿論です。じゃあ、俺はこれで」

そういうて、男は足早にその場を立ち去つた。地和はそれを見送つた後、本をしげしげと見つめる。埃を被つているものの、表題はなんとか読み取れた。

「ええっと、南華老仙……太平……要術……？」

「これぐらい古いなら好事家やそういう物好きな輩に売れるだろ」と思い、地和は本を捲る。

「え？ 嘘！？ これって」

本の中身を見た瞬間、地和は驚き、本を落としてしまう。そしてすぐに本を拾い、内容をじっくりと見る。

「凄い…………！？ 一人にも知らせなきや！」

そういうて、宿に戻る地和。

第6話「予言」（後書き）

どうもフイロです。今日は古い師の話と三姉妹のお話です。次回もお楽しみに。それと今回から記号を置いて、区切りを付けました。やはりこの方が見やすいですね。では

第7話「黄色い布」

「あ～、カツタリ～」

そういうて、蛮骨は農具を捨て、逃げ去る農民を見る。蛮骨がいる場所はとある農村。蛮骨は欠伸をしながら考える。これで村の暴徒鎮圧も五回目。そろそろ飽きて来るのも仕方がない。そして決まつて鎮圧した村で見つかるのが。

「黄色い布ね～」

そういうて、地面に落ちていた黄色い布を足で小突く。何故か農民はこの布を頭に巻いているのだ。コレが何を意味するのかは分からぬ。そもそも蛮骨には興味がない。ソレを考えるのは桂花や秋蘭、華林の仕事だ。

「そろそろアカイ戦が来ねえかな～」

そういうて、自分の背後に裏拳を放つ。重い手応えとなにか太い物が折れる音が聞こえる。顔だけ振り向くと、農民が茫然と自分が持っていた鍬が半ばで折れているのを見ていた。

「そんなんで俺を殺せると思つてんのか?」

その言葉で我に返つた農民は一目散に逃げる。蛮骨は面倒だと心の中で呟きながらため息を吐く。農民は殺すな、そう華林に厳命されているのだ。雇い主の意向ならば従つしかないが。不満である。

「蛮骨殿、お疲れ様です！――！」

そうこうで、近づいてきたのは蛮骨より年上の男性だった。

「おひへ、他の奴等は？」

「はい。夏侯惇様、夏侯淵様、許緒様共に御健在です」

「まあ、当たり前か」

「せうこうって、頭を搔く。すると、追撃に出でた兵たちが戻ってきた。

「んじや、戻るとするか」

「はい……！」

兵が姿勢を正し、返事をした後、戻ってきた兵士に指示を飛ばす。蛮骨は足元に落ちている黄色い布を拾つ。

「ああ、派手な戦でもねえかなー」

空を見上げながら蛮骨は呟いた。

?

「やひへ……やはり黄色い布が」

その日の朝議も、暴徒鎮圧の話だった。これで五回目である。春蘭、秋蘭、季衣　　彼女達が相手をした暴徒達も黄色い布を持っていた。

「明確な目的は不明。暴れたいだけ暴れて、鎮圧される」

「まるで子供の騒々の様だ」

春蘭の言葉に集まっていた者が頷く。

「本当ね。桂花、それひまじつだった？」

「はっ。各地の諸侯に連絡を取つてみましたが、何処も対応に手を焼いているようです」

その答えに華林がため息を吐く。

「何処の諸侯も私達と同じ、か……具体的には？」

「はい。ここと、ここと、それからこちらう……」

華林の問いかに答えながら桂花は地図に小石を置いて行く。どちらかなり広い範囲で暴れているらしく、密集している所は少なかつた。

「それと、敵の首領は張角と言つたりじこですが、正体は全くの不明だそうです」

桂花が思い出したように華林に報告する。

「正体不明？ますます訳の分からぬ集団ね」

「敵の頭が分かつても何処にいるのかが、分からんじやどうする事もできねえしな」

「変な取り決めでもあるんでしょうかね？あいつらに……」

季衣の言葉と同時に集まつた者たちがため息を吐く。

「分かっているのは首領の名前とこの黄色い布だけ……か」

華林がそういうと同時に会議場に一人の兵士が入ってきた。

会議中失礼いたします！！！

一言え
一体何事か

「はつ！！南西の村で、新たな暴徒が発生したと報告が。また黄色い布です」

その報告を受けた瞬間、蛮骨以外の表情が真剣な物になる。

「またか……」

蛮骨は心底うんざりした表情で呟く。そして蛮骨は華林を見て。

「なあ、見せしめに殺しちゃ駄目か？」

「駄目に決まつてゐるでしょつ！――――！」

大声で即答された。そして華林は咳払いを一つすると。

「休む暇もないわね。今度は誰が行くの？」

それを聞いて蛮骨が物凄く嫌そうな顔をした。

「はいっ！－－華琳さま、ボクが行きます！－－ボクに行かせて下さい！－－！」

季衣が必死に手を上げる。村が襲われて黙つていられないだろう。だが、華林は季衣の言葉に顔を顰める。

「季衣。お前は最近、働き過ぎだ。こゝ暫く口クに休んでないだろう」

春蘭の言つ通り、季衣は文字通り、休む暇なく出撃しているのだ。しかし春蘭の忠告を無視して季衣は自分がやりたいと言つて聞かない。

「そうね。確かに季衣はここ最近働き過ぎてるわ」

華林の言葉に季衣は田に薄つすらと涙を浮かべながら反論する。

「華琳さま！－－－ぢつじてですか。ボク、全然疲れないのに」

「季衣。貴女の心と体はとても貴い物だけど……体調を崩しては元も子も無いわ」

「体調なんか崩しません……。ボク、無茶なんてしません……」

「いいえ、無茶よ。今回の出撃は控えて、ゆっくり休みなさい」

優しく華林は諭す。季衣は俯き、零れ始めた涙を必死に拭う。

卷之三

「季衣ツ？」！

突然、季衣は走つて会議場を出て行つてしまつた。それを茫然と見る春蘭。

「桂花、隊の編成を」

「御意」

華林は静かに桂花に指示を出し、桂花もまた静かに隊の編成をする。

「蛮骨」

「あん？」

華林の言葉に顔を顰める蛮骨。

「頼みたい仕事があるんだけど」

そう華林が言つと、春蘭、秋蘭、桂花が蛮骨を見る。その視線の意味を理解した蛮骨は乱暴に頭を搔くと。

「つたぐ、一つ貸しだからな……！」

そう、吐き捨て。会議場を出る蛮骨。それを見送った四人は同じような笑みを浮かべる。

「適任ね……」

「ええ、適任です」

「うむ」

「あいつには適任です」

?

「季衣

「お兄ちゃん……」

城壁の上に腰を下ろす季衣に蛮骨は声を掛ける。季衣は蛮骨に気が付くと、涙を拭いて振り向く。

「よつと」

蛮骨は何も言わず、季衣の隣に座る。

「…………」

「…………」

二人は無言。蛮骨は空を見上げ、季衣は俯いている。すると、何処からか低い音が聞こえた。

「ん？」

「あうっ……………？」

蛮骨が視線を下げると、季衣は頬を赤くして腹を押さえている。それを確認して蛮骨は笑みを浮かべ、懐から小さな包みを取り出す。

「ほひよ

そういうって、包みを季衣に渡す。季衣はおずおずと受け取り、包みを開ける。包みにはオーギリが三つ入っていた。

「……頂きます

そういうって、季衣はオーギリを食べる。蛮骨はそれを見た後、また空を見上げる。

「お兄ちやんも」

「ん？」

オーギリを一つ食べ終えた季衣が俯いたまま呟く。

「蛮骨兄ちゃんも。休んだ方がいいと思つ?」

「あんな

「え?」

蛮骨の発言に季衣が戸惑つ。

「俺は別にお前が無茶しようが何しようと止めねえよ」

そう言つて、身体を伸ばす蛮骨。

「ただな。仲間に迷惑かけんのは駄目だ」

「仲間…………？」

蛮骨は頷いて。

「春蘭も秋蘭も華林も、ついでに桂花もお前の仲間だ。もつ少し、アイツ等に甘えてもいいんじゃねえか?まだ、子供なんだしよ」

蛮骨の言葉に季衣は俯き、しばらく何かを考え、顔を上げる。そこには先程の涙を浮かべた顔などなく、満面の笑みを浮かべる。

「うふふ……」

そういうて、オーギリを素早く食べ終えると、城壁の上に立ち、歌を歌い始める。

「ん?」

何処か聞いたことがある歌に蛮骨は首を捻る。

「その歌、何処で覚えたんだ？」

「街に来てた旅芸人さんの歌で……えーと、名前は確か張角……」

季衣が名前を呴くと何かに気が付く。蛮骨も同じように気が付いたのか、立ち上がる。

「お兄ちゃん！――！」

「先ずは華林の所だな」

蛮骨の言葉に季衣は頷き、華林の許に駆けだす。

「さて、どうなるかね~」

蛮骨は頭を搔きながら季衣の後を追つた。

?

その日の晩。秋蘭率いる部隊が戻り、すぐさま報告会が開かれた。

「……間違いないのね？」

「はいっ！…ボクが見た旅芸人さんは三人組の女の子でした」

「私が今日行つた村でも、三人組の女の旅芸人が目撃されます。恐らく同一人物かと」

季衣の言葉に秋蘭が手に入れた情報を付け加える。それに桂花が続く。

「季衣の報告を受けて、黄巾の蜂起があつた陳留周辺の幾つかの村にも調査の兵を向かわせましたが……大半の村で目撃例がありました」

「その旅芸人の張角という娘が、黄巾党の首領の張角という事で間違ひは無さそうね」

「正体が分かつても、目的が分かんねえとな〜」

蛮骨が面倒くさそうにぼやく。華林はため息を吐いて。

「そつよね。ふつ…………どうせなら大陸制覇の野望でも持つていれば、遠慮なく叩き潰せるんだけど」

「しかし、潰す事に違いはないのでしょ？？」

「ええ。夕方、都から軍令が届いたわ。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね」

「いやに遅くねえか？」

蛮骨の言葉に華林が頷く。

「それだけ、今の朝廷が無能という事だ」

秋蘭が呆れながら呟く。

「でも、これで大手を振つて大規模な戦力が動かせるわ」

華林は笑みを浮かべていると、出撃の準備をしていた春蘭がやつてきた。

「どうしたの春蘭。兵の準備が終わつたようには見えないけど」

「はい。それがまた、例の黄巾の連中が現れたと。それも今までにない規模だそうです」

「…………先を越された。これじゃ、後手に回るしかない…………か」

悔しそうに呟く華林。

「春蘭、兵の準備は？」

「申し訳ありません。最後の物資搬入が明日の払暁になるそうで……既に兵士達は休息を取らせています」

春蘭の言葉に華林がため息を吐く。

「間が悪かったわ。恐らく連中は、幾つかの暴徒が寄り集まっているのでしょうかね」

「集団が集まつていると云つ事は……必ずそれ等を纏めている指揮

官が居る筈ですね「

桂花の言葉に華林が深々とため息を吐く。

「さて、今度の敵は今まで通りに行かないわ。どうするか……」

「華琳様ッ！！！」

華林がやうに顔をと季衣が手を上げる。ヒーハーの三分が出来たついで、
とこつ事なのだけれど。

「季衣ッ！お前は暫く休んでいろと言つただひ」

「はい。ですからボクだけで出撃するつもりはありません。無茶もしません――！」

強い言葉に華林が押し黙る。

「春蘭、すぐに出せる部隊は？」

「はい。当直の隊と、最終確認をわたる隊は残つてゐる筈です」

春蘭の葉に華林は領ぐと
力強く季衣に指示する

「季衣。それ等を率いて、先発隊として今すぐ出発なさい。秋蘭は季衣の補佐をお願い。くれぐれも無理をさせないよ！」

「御意」

二人が返事をする。華林は次に桂花と春蘭に視線を向ける。

「桂花は後発部隊の再編成を。明日の朝に来る荷物は待つてられないわ。春蘭は今すぐ取りに行つて、払暁にまで出発できるよつじ下さい」

「「御意ッ……！」」

そして最後に残つた蛮骨に視線を向け。

「蛮骨。先発の部隊と合流するまでは指揮をしている私の護衛を。合流したら最前線で働いて貰うから、今の内に休んでおいて」

「おつかれさまでござります」

蛮骨が嬉しそうに答える。

「各自、[口]の任を全うするよつじ……以上、解散……」

その言葉を合図に慌ただしく指示された者達が会議場を出て行く。残つたのは蛮骨と華林だけだ。

「んじゃ、俺は休ませてもらつわ

「蛮骨」

華林に呼び止められ、蛮骨は首だけ振り返る。華林は玉座から立ち上がり、近づいてくる。

「貴方、まさか皆の手伝いをしないで寝るつもり?」

「お~お~、俺に何期待してんだよ。俺は唯の傭兵だぜ?戦うのが仕事でその他の仕事はお前らがやれよ」

笑つて返す。それに不満げな顔をする華林。

「ま、季衣辺りに勧みの言葉位ならしてやれるけどな

「もう……。なら、私は今から少し寝ておくけど。寝る時、部屋に来る?」

そつと指で蛮骨の背をなぞる。蛮骨はソレを鼻で笑つて。

「そうだな。お前がもう少し『女の体』になつたら考えてやるぜ?」

蛮骨の答えに思いつきつ不機嫌になる華林。

「……前々から気になつてたんだけど。貴方が女を『大人』として扱う基準は何なの?……やっぱり胸?」

自分の胸に手を添えた華林が呟くと。蛮骨は笑つて。

「ま、それもあるが。そうだな……女として魅力が十分に備わつてる奴かな」

「それってつまり、私には女としての魅力が欠けてるつて事?」

蛮骨が無言で頷く。

「ま、同じ女ならお前じゃなくて秋蘭を相手にしたいね」

そういうて、蛮骨は会議場を出て行く。後に残された華林は悔しそうに唸ると。

「見てなさい。必ず、アンタが見惚れる様な女になつてやるんだから」

等と、何やら（本人にとつては）重大な決意をした様だ。

第7話「黄色い布」（後書き）

いつも、フィロです。今回は『黄巾党の乱』の序盤をお送りしました。それでは次回をお楽しみに

第8話「義勇軍」

「急げ急げ！－急いで先発隊に合流するぞ－－！」

先発隊として討伐に向かつた秋蘭と季衣の二人と合流する為、華林達本隊は出陣した。そして昨日、徹夜で働いていた筈の春蘭が高揚しながら叫ぶ。それを見た華林は呆れながら。

「そんなに兵を急がせては、戦つ前に疲れてしまつわよ？春蘭」

「うう……しかし華琳様、秋蘭や季衣が戦つているところの二ノンビリとは……」

「だからといって無茶は駄目よ。これ以上疲弊しては、勝てる戦も勝てなくなるわ」

華林が春蘭を宥めていると、桂花が慌てて彼女に駆け寄ってきた。

「華琳様。秋蘭から報告の早馬が届きました」

「分かつたわ。報告なさい」

「はう。どうやら敵部隊と接触したらしく、その中に張角らしき存在は確認できていない様ですが、予想通り敵は組織化されており、並の盗賊より手強いとのこと……」

桂花の報告を受け、華林達に緊張が走った。不安に駆られたのか、春蘭の顔が歪む。

「春蘭、そんなに心配するほど先発の奴らって弱かつたか?」

蛮骨が春蘭の横で呟く。

「そんな事あるか!…………一人とも勇猛な将だ!……」

怒りを含んだ声で叫ぶ。それを聞いて蛮骨は笑い。

「だったら、心配するだけ無駄だろ?」

言われ、春蘭が黙る。

「大体は分かったわ。それで、敵の数は?」

「夜間の為、詳細は不明。ただ先発隊よりも明らかに数が多い為、迂闊に攻撃せず、街の防衛に徹するとの事です」

その言葉に蛮骨は秋蘭らしい、と考える。華林も同意見のようだ。
「張角本人が指揮を執っているかと思ったけど、やはり別の指揮者が居るみたいね」

「恐らく、張角と言う者の才覚、侮り難い物があります」

珍しく桂花が華林以外の人間を褒める。確かにそれだけ人を惹きつけるオガ無ければこんな大集団を纏めることなど出来はしないだろう。

「桂花の言う通りだわ。人を惹きつける能力が極端に高い張角……」

面白いわ

華林が楽しそうに呟く。突然、一人の兵士が駆け寄つて来た。見るとその兵士は先発隊として出発した兵士の一人であつた。

「報告します！！許緒先発隊、敵軍と接触！！戦闘に入りました！！！」

「…………状況は！！！」

「数と勢いに押され、味方は不利！！街に籠つて防御に徹していくますが、戦況は苦しい状況です。至急、援軍を求むとの事！」

段々と事態が不味い状況になつてゐるようだ。秋蘭はそれを見越してこの兵を送つたのだろう。それを華林が聞くと兵は頷き。

「仰る通りです。ですが自分が出された段階で、戦力差はあまりに大きく…………」

「やはりね。総員、全速前進！！！！追いかけない者は容赦なく置いて行くわ！！！！！」

華林の叫びと共に春蘭が激を飛ばす。華林はそれを頼もしく聞きながら報告に来た兵に指示を出す。

「貴方は殿に付いて、脱落した兵達を回収しながら付いてきなさい。以降は本隊と合流するまで、遊撃部隊として指揮を任せます。良いわね？」

兵は姿勢を正し、了承する。

?

「秋蘭様……西の大通り、三つ田の防柵まで破られました……」

「……ふむ、防柵はあと二つか。どのくらい保ちそつだ？ 李典」

秋蘭はそういうて李典という少女に問う。蛮骨に竹力ゴを売った少女、李典は悔しそうに唸る。彼女は秋蘭たちが街にやつてきた時にいた義勇軍の一人だ。

「せやなあ……応急で作ったもんやし、後一刻保つかどうかって所やないか？」

「……微妙な所だな。防柵が保つままで、姉者たちが間に合えば良いのだが……」

「しかし夏侯淵様がいなければ、我々だけでここまでも耐える事は出来ませんでした。本当にありがとうございます」

銀髪で、身体中に古傷のある少女が感謝する。彼女の名は樂進。李典と同じ義勇軍の一人だ。

「それは我々も同じ事。貴公ら義勇軍が居なければ、我々は討ち取られていたのかも知れん。それと、樂進」

「は、はい」

名前を呼ばれ、緊張したようて返事をする。秋蘭は笑みを浮かべ。

「礼を言つのはこの戦を無事に終わらせた後だ」

「そうですね。いざとなれば、私が敵に討つて出て

「そんなの、駄目だよ…………！」

樂進の言葉を季衣の怒声が遮る。自分よりも幼い子供の強い言葉に樂進は驚く。

「そういう考へは駄目だよ…………今日は春蘭様や華琳様。お兄ちゃんが来てくれる。だから最後まで守りぬかないと」

そう言われ、樂進が俯く。

「せやせや、犬死したって誰も褒めてくれへんよ？」

「樂進さんはもひとつボク達を…………ううと、仲間を信じて……」

「分かりました」

二人に諭され、樂進が頷く。

「…………ふふっ」

「あ、何が可笑しいんですかあ？秋蘭様」

秋蘭は季衣に笑いながら。

「いや、昨日と一変していたのでな。蛮骨になんと言われたのだ？」

「えつ！？そ、それは？」

秋蘭が聞くと、季衣は恥ずかしいのか頬を赤くして俯く。李典は蛮骨、といつも前に首を傾げる。

「夏侯淵様あああああ！！！東側の防壁が破られたの！！向こうの防壁は、後一つしかないの！！！」

慌てて報告してきたのは、メガネを掛けた子禁という少女だった。彼女も義勇軍だ。その報告に李典は舌打ちする。

「……あかん。東側最後の防壁は、材料が足りひんかつたから、かなり脆いで」

「仕方ない。西側は防衛部隊に任せ、残る全員で東側からの侵入を押し止めるぞ」

「先陣は私が切ります。私の火力を集中させれば、相手の出鼻は絶対に挫けます！！！」

樂進の言葉に秋蘭が苦い顔になるも「承する。かなり危険だが、一刻を争う状況では仕方がない。

「先陣を頼む…………死ぬな」

「私などには勿体ない御言葉です。夏侯淵様」

「皆、こゝが正念場だ！！！力を须へし、何としても生き残るぞ！
！！！」

秋蘭の言葉にその場に集まつた誰もが勇氣づけられる。すると複数の兵が慌ててやってきた。

「報告ッ！！街の外に大きな砂煙！！大部隊の行軍の様です」

「援軍か……して旗は？」

場の空気が重苦しくなる中、兵が笑みの表情で。

「味方です！！！旗印は曹と夏侯！！！曹操様と夏侯惇様です！！！
！」

その言葉に皆が歓喜の声を上げる。秋蘭はフツとため息を吐き。

「間に合つたか。よし、これで勝ちは決まつたな」

そういうて、反撃の準備を始める。

？

「お？秋蘭も気付いたみてえだな」

「そのようね。部隊の展開はどうか！！！」

「完了していますーーー！何時でも、」命令をーーー！」

華林の言葉に桂花が即座に答える。

「それと、敵の本隊と戦つ為にここには迅速に処理すべきかと

「判つたわ。…………春蘭！…………！」

「はつ…………お任せ下れ…………！」

「蛮骨。護衛の任を解くわ。存分に暴れなさい」

「応つ…………遅れんなよ、春蘭…………！」

叫びと共に蛮骨が走り出す。

「貴様…………遅れるな…………！」

それを馬に乗った春蘭と彼女の部隊が続く。殺戮の宴は始まった。

？

「オラアツーーー！」

叫びと共に蛮骨は蛮龍を振るつ。同時に鮮血が空に舞つ。

「ハアツ！－！」

蛮骨の後ろ、丁度蛮骨に斬りかからうとした敵を春蘭が斬り捨てる。

「何をしている馬鹿者！－！」

そう怒鳴り、敵を続々と斬り捨てる。蛮骨は鼻を鳴らして。

「ああ？人がわざわざ御情けで獲物放つておいたんだ。感謝ぐれえ欲しいもんだ！－！－！それとな、馬鹿に馬鹿扱いされたかねえよ」

「なんだと？私の何処が馬鹿だ！－！－！－！」

蛮骨の言葉に顔を怒りに染めた春蘭が敵を斬り捨てた剣を蛮骨に突き付ける。

「ハッ！－！－猪みてえに突撃するしか能がねえ奴は馬鹿で充分なんだよ。それとも猪女の方が良かつたか？」

「貴様へ、言わせておけば好き勝手にベラベラと。敵より先に貴様を斬つてやる！－！－！－！」

「いいぜ。ここにいる雑魚より楽しめそうだ。来な！－！－！」

蛮骨は獰猛に笑つて、春蘭の剣を蛮童で弾く。

『俺達を無視すんじやねえ！－！－！－！－！－！』

その瞬間、周囲にいた黄巾の兵が叫びながら一人に殺到する。

「「邪魔すんな…………」」

その叫びすらもかき消す程の咆哮を上げた春蘭と蛮骨は殺到してくる敵を薙ぎ払う。黄巾の怒号は数分もしない内に恐怖の叫びに変わっていた。

?

「た、助け

」

「うっせえ」

命乞いをしようとした兵を斬り捨てた蛮骨は春蘭を睨む。同じように戦闘も敵を片づけ、蛮骨を睨む。

「んじゃ、邪魔者も消えたし。やるか?」

「ああ」

春蘭が短く答える。同時に一人が低く駆け、互いの得物をぶつけようとする。

「止めなさこ…………」

「でつ？！」

「ひへー。」

叫びと共に蛮骨と春蘭の頭に衝撃が入る。一人は勢いを失い、倒れる。

「まったく、敵を全滅するのはいいけど、味方同士で殺し合い始めるのはどうこう事かしら？」

割つて入つた華林が呆れながら喋る。

「まあ、いいわ。ほら、一人ともわざと返り血を流して秋蘭たちと合流するわよ」

華林はそういうて、さつさと行つてしまつ。それを慌てて春蘭が追いかける。蛮骨は鼻を鳴らし、立ち上ると兵が持つてきた水を頭から被る。

「ふう～」

手拭いで顔を拭いた後、蛮骨は戦場を見る。

「…………氣のせいか

そういうて華林達の後を追う。蛮骨の視線の先、彼と春蘭が片づけた屍で何がが動いた様に見えた。

?

「秋蘭！…季衣！…無事か！…！」

そういうて春蘭が大した怪我がない春蘭と季衣を見て安堵する。

「よお、しぶとく生き残つてるな」

笑みを浮かべ、蛮骨が秋蘭に近づく。秋蘭も笑つて。

「危ない所だつたがな。まあ、それでも死ぬ気はないぞ」

「お兄ちゃん！…！」

「おつと」

季衣が満面の笑みで蛮骨に飛び付く。蛮骨は難なく季衣を抱き止める。

「二人とも、無事でなによりだわ。損害は……大きかつた様ね」

「はつ、しかし援軍のお陰で助かりました」

そういうて秋蘭はこれまでの経緯を話した。

「それと彼女達のお陰で、防壁こそ破られましたが、最小限の被害で済みました！…！」

「街の人たちも何とか無事です。ボク達、精一杯頑張りました！！！」

華林は季衣の頭を撫で、秋蘭に訊く。

「その協力者である彼女達とは…………？」

「はつ。お前達、二二二二……」

「はつ。大梁義勇軍と言います。黃巾党の暴乱に対抗する為、兵を挙げました」

秋蘭の呼びかけに楽進、于禁、李典がそれぞれ姿を見せた。その中で樂進が代表して、華林に自己紹介していく。

「あつ。お前は…………」

「あーっ！…あの時の服のお姉さん」

「あん？その形、あの時の嬢ちゃんか？」

「おーッ！…兄さん、軍人やつたんか？」

などと、脱線してしまい。少々、華林が不機嫌になつたのは仕方の無い事だろう。

「この街が襲われていのを見過ごせず、挑みましたが…………まさか、敵が大規模になるとは思いも寄りませんでした。ですがこうして、夏侯淵様に助けて頂いた次第です」

樂進は一度咳払いした後、華琳に説明する。

「……そう。己の実力を見誤った事はともかく……街を守りたいと言つ、その心掛けは大したものだわ」

そういうて笑みを浮かべる華琳。

「……貴方達が居なければ大切な将を失っていたわ。秋蘭と季衣を助けてくれてありがとう」

「はっ！――ありがたき御言葉！――！」

深く頭を下げ、樂進が華琳の言葉を受け取る。すると、季衣が華林に言つ。

「あの、華琳様。それでですね、凪ちゃん達を……華琳様の部下にしてもらえませんか？」

季衣の申し出に華琳は樂進を見つめながら。

「……義勇軍が私の指揮下に入ると言つ事？」

「はつ。聞けば曹操様もこの国の未来を憂いでおられるとの事。僅かな力ではありますが、その大業に是非、我々の力を加え下さいますよ」

樂進の言葉を聞いた後、他の一人の意見を華琳が聞くと、二人とも樂進と同意見だった。

「秋蘭。彼女達の能力は……？」

「はつ。一晩共に戦いましたが、皆鍛えれば一角の将になるかと……」

「そう、季衣も真名で呼んでいるようだし……良いわ。三人の名は？」

尋ねられ、三人が答える。

「樂進と申します。真名は風……曹操様にこの命、お預け致します」

「李典や。真名の真桜で呼んでくれてもええで。以後宜しく」

「于禁なのーっ！……真名は沙和つて言ひの。宜しくお願ひしますのーっ！」

三人の名を聞き、華林が笑みを浮かべる。そして蛮骨に視線を移す。

「蛮骨」

「ん？」

「貴方にこの三人の指揮を任せるとわ」

華林の言葉に蛮骨は驚く。

「おいおい、いいのか？傭兵の俺に部下作らせて」

「ええ。貴方、中々部下思いの様だし。それに傭兵だからって関係

ないわ。私は貴方を信頼しているから二人を任せること

そういうて、微笑む華林。蛮骨は頭を搔き、三人を見る。

「これからも宜しうつな~」

「宜しくお願ひしますの一つ……」

「曹操様の命とあらば、」これからお願いします隊長

何故か、蛮骨が三人の部下になつていた。

「まあ、いいか」

そういうて笑う蛮骨。これでも一癖も二癖もある『七人隊』を束ねていた蛮骨だ。『七人隊』の面々に比べれば、この三人はまだ可愛いものだろう。すると聞き慣れたヒステリックな声が響く。

「華琳様！！！私は断固反対ですッ！！！」んな男に部下を付けるなんて……」

「あん？ 桂花の声がするな。アイツ、何処にいんだ？」

「さつきからここに居たわよ。野蛮人！――！――！」

「オオツ！？悪いな、小さすぎて見えなかつたぜ」

「キイ———ッ！—！」

「…………一人とも、そこまでにしなさい。桂花、周辺の警戒は？」

華林が一人の喧嘩、もとい、桂花をからかっている蛮骨を呆れながら仲裁する。

「はい。周囲の警戒と追撃部隊の出撃、完了致しました。住民たちの支援物資の配給も、もつすぐ始められるかと」

「上出来ね。それで桂花、蛮骨の下に付ける事がどうして不満なの？」

「はいっ！……どうせ、この野蛮人の事です。善からぬ事を考えているに決まっています」

桂花の言い分を蛮骨はあるで聞いておりず、新しく部下となつた三人と交流を深めていた。

「へえ、その槍回るのか。面白えなー」

「ややろー」

「樂進は拳で戦うのか。いいね、醜ましい女は俺好みだ」

「あ、ありがとー！」わざわざ

「風ちゃんが赤くなってるのーっ！……」

「うう……これは私の……」

「よし、陳留に戻つたら軽く宴でもやるか」

等と盛り上がっている。

「どうやら、貴女の意見は全部無視の様ね」

「ちょっとそこの野蛮人！！！！人の話くらい「鬼だあああつ！！！
！！！」へつ？」

桂花の声を遮って一人の兵が叫ぶ。

第8話「義理軍」（後書き）

どうも作者です。ようやく蠟骨の部下が出来ました。そして次回は
ちょっとオリジナルの御話。御期待下さい。

第9話「鬼と鬼の花嫁？」

「落ち着け！――何があった？」

秋蘭に怒鳴られ、冷静さを取り戻した兵は戦場跡で鬼を見たと話した。

「鬼だと？馬鹿馬鹿しい」

その報告に春蘭が鼻で笑つて吐き捨てる。報告を聞いた誰もが同じ意見だった。

「んで、その鬼ってのは、どんな姿なんだ？」

唯一、蛮骨はその兵に真面目な顔で訊く。兵が言つにはその鬼は大の大人を優に超える体躯、恐ろしい形相で何かを探して死体を漁つてゐる。という話だった。それを聞いた蛮骨は顎に手を当てて、暫く考えた後。

「見てみりや、分かるか。おい、鬼がいたのは何処だ？」

「蛮骨、お前はこの兵士の言葉を信じるのか？」

秋蘭の問いに蛮骨は笑つて。

「本當がどうか確かめに行くんだよ。俺一人でいいぜ。びしげ、怖くて来れないんだからよ」

快活に笑つて歩き始める蛮骨。それに慌てて付いて行くのは屈だ

つた。

「お供します」

「好きにしな」

笑みを浮かべる蛮骨。

「全く、誰も怖いなんて言つてないわよ」

「その通りだ。私は鬼なんて怖くもなんともないぞ。なあ、秋蘭」

「私に振られても困るが。まあ、確かに怖くはないな」

などと、蛮骨の後を追う人数が増え、結局、全員付いて行く事になつた。

?

「…………確かに、鬼ね」

「……本当にいるとは」

華林と秋蘭が呟く。蛮骨以外の人間は絶句して田の前の光景を見ている。田の前には甲冑を着込んだ鬼が何かを探す様に死体を放り投げている。

「どうします？華琳様」

……先ずは様子見ね。つて蠍骨？！」

華林の叫びに皆の視線が蛮骨に集中する。蛮骨はまるで惹き寄せられる様に鬼に向かつて歩いて行く。しかも、蛮龍を持つていない。

「蛮骨！――！尻つて来い！――！」

「お兄ちゃん！…………！」

秋蘭と季衣の叫びも空しく、鬼が蛮骨に気付いた。そして二人が同時に走り出す。

「大兄貴いいいいいいいつ！！！！！！！」

一人は満面の笑みで近づき、抱擁する…………寸前に蛮骨が鬼凶骨を殴り飛ばす。

۷۸

その時、その場にいた者は理解できない光景を目にした。蛮骨よりも、一回り、一回り大きい巨体が蛮骨の拳を受け、吹き飛んだのだ。そして地響きを立てて、巨体が大の字で倒れる。

「つたぐ、何時も言つてるだろ？お前に抱きつかれたら、幾ら俺でも洒落にならねえって」

そういうで、蛮骨は凶骨を指さす。

「いや～、悪かったよ大兄貴。つい懐かしくてや～」

そういうで、顎を擦りながら凶骨が上半身を起こす。それを見て
蛮骨はニカツと笑みを作り。凶骨の前にドッカと胡坐を搔く。

「確かに久しぶりだな。ていうか何してんだ。こんな所で？」

「ああ、ちょいと探し物でよ～」

凶骨がそういうと、犬の鳴き声がした。その方を向くと、子犬が
鳴いていた。

「あん？」

「おおっ！？そこにはいたのかチャッピー……！」

そういうて、凶骨が子犬 チャッピーを優しく抱きしめる。

「そいつが探し物か？」

「ああ、俺の家族のチャッピーだ。そうだ、もう一人、家族がいる
んだ」

そういうて、凶骨が照れくさそうに頭を搔ぐ。何となく、蛮骨は
当たりを付ける。

「成る程、嫁さんだな？ やるじやねえか、凶骨。どんな子なんだ？」

そういうで、肘で小突く。すると、凶骨は照れ笑いを浮かべて。

「そ、それは「ダーリン……」お、丁度いい所に」

凶骨の言葉を『野太い』声が遮る。それを聞いて蛮骨の笑みが凍る。そして砂煙をあげて疾走してきた影は凶骨の隣で止まる。

「ほら、チャッピーが見つかつたぞー」

「も〜、チャッピーたら本当に『血の臭い』が好きなのね〜。誰に似たのかしら?」

傍から見れば、仲睦まじい夫婦の会話なのだが、どちらの声も『野太い』。蛮骨の頬に汗が伝う。そして砂煙が消えると、そこには誇らしげな笑顔の凶骨が隣にいる。

「コイツが俺の恋人の貂蝉です」

「初めまして。私が貂蝉よ?」

股間を最低限の桃色の布で覆つた巨漢の『男』を紹介した。

「.....」

「あら~どうしたのかしら」

「ああ、きっと貂蝉の美貌に呆けてんだよ」

「まあ、ダーリンつたら~?」

そういうて、貂蝉は拳で凶骨の胸板を殴る。凶骨は嬉しそうに笑つてゐる。蛮骨はもう一度、貂蝉を見る。褐色の肌。蛮骨より一回り大きく筋骨隆々の体躯。禿げ頭にもみ上げ辺りから三つ編みが垂れている。

「なあ、凶骨。貂蝉…………さんは男だよな？」

自然と敬語になる蛮骨。それを聞いて貂蝉はクルッと回転し、ポーズを決め。

「そう、身体は男。でも、心は女。私は『漢女』なのよ……！」

まるで世界に宣言するように叫ぶ貂蝉。そしてそれを何度も頷いている凶骨。

「大兄貴」

「お、おひ」

「愛に性別は関係ないんだぜ」

真剣な表情で喋る凶骨に蛮骨は止まらない汗拭いながら聞く。

その瞬間、蛮骨は理解した。凶骨は本氣で貂蝉を愛しているのだと。

「そりか…………。で?一人は何処まで進んでんだ?」

納得した蛮骨は「カツ」と笑い、凶骨達に訊く。一人は頬を染め、

喋り始める。つぐづく能天氣で器の「カイ蛮骨」だった。

?

「あの鬼って、人間だつたの？」

「いや、鬼と言われた方がしつくり来るんだが」

「後から来た奴もなんか、鬼と関係深そうね」

等と、蛮骨達を遠巻きに見ていた者たちが騒ぐ。

「さて、どうしたものか。蛮骨の知り合いの様だが」

「まあ、話が終わるまで待ちましょう。それとも、誰かあの輪に入りたい人いる？」

華林が冗談めかして訊くも、皆は即座に首を横に振った。

?

「成る程な～」

蛮骨が一人の馴れ初めを聞き終え、感慨深く頷く。

「そういえば、大兄貴は今なにやつてんだ？」

凶骨が聞いてくる。

「俺か？俺は変わらず傭兵だ」

そういうて、ニカッと笑う。すると、逆に凶骨の顔が暗くなる。

「…………大兄貴。頼みがあるんだ」

「…………言つてみな」

暗い声音で喋る凶骨に蛮骨も真面目になり、聞き返す。凶骨は数秒の間を置き。

「俺、『七人隊』を抜けようと思うんだ」

その言葉に蛮骨はしばし目を瞑り。

「訳を言ってみな」

そう言った。

「俺は……このデカイ身体は何の為にあるのか、ずっと気になつてたんだ。大兄貴に拾われて、戦に使つてる時もそうだ。何かが足りねえ、そう思つてた。だからといって、大兄貴に付いてきたのは間違ひじやなかつた。大兄貴には感謝してんだ。でも、何かが足りな

かつた。それが貂蝉に会つてようやく、分かつたんだ。俺は……俺の力は貂蝉を守る為にあるんだと。自分勝手なのは分かつてる。けど、もう決めたんだ!!!!!!

「ダーリン……」

凶骨は頭を下げる、蛮骨に思いのたけをぶつける。蛮骨はそれを静かに聞き、フツと笑みを作る。

「顔を上げな、凶骨」

「言われ、顔を上げた凶骨。

「凶骨。忘れたのか?『七人隊』はもうとつぐに無くなっちゃったんだぞ?それを今更抜けるも何もねえよ。テメエの勝手だ」

「大兄貴……」

「それにな。テメエの人生だろ?テメエの為に使わねえで誰の人生だ?テメエが決めたんならソレを貫けよ」

そういうて、凶骨の肩に手を置く。

「大兄貴……」

「おいおい、大の男が泣くんじゃねえよ。みつともねえ

そういうて、蛮骨は立ち上がり、凶骨に背を向ける。

「達者でな。凶骨」

「大兄貴も達者で。こんな俺が言うのもなんですが、幸せになつて
くれ」

「ハツ。当たり前だ。テメエ等より幸せになつてやるよ」

そういうて、背中越しに手を振りながら歩き出す蛮骨。それを見た凶骨は隣にいる貂蝉と共に立ち上がり。

「帰ろう。俺達の家に」

「ええ、今日の夕飯は猪の丸焼きよ」

「ソイツはいい。お前は大陸一の漢女だ！――」

「もう、ダーリンつたら～？」

そういうて、笑い声が荒野を木靈する。

?

「お帰り、蛮骨」

「おつ」

蛮骨は晴れやかな笑顔で戻ってきた。

「…………何があつたの？」

「ん？ ちょっと弟分が幸せになつた事が嬉しくてな」

そういうて、快活に笑つ蛮骨。その場にいた者は全員首を傾げた。

第9話「鬼と鬼の花嫁？」（後書き）

どうも、作者です。今回はギャグに見せかけ『七人隊』一の巨漢凶骨の登場＆退場です。人気があればまた出てくるかも。因みに凶骨の大きさはアニメに出てきた死ぬ前のかつて（一瞬しか出てませんから分からない人も多いかも）では次回もお楽しみに

第10話「部下」

「さて、これからどうするかだけれど……。新しく参入した凪たちもいることだし、一度状況をまとめましょ。…………春蘭」

「はつ。我々の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。細かい事は……」

華林に任され、意氣揚々と喋り始める春蘭だが、直ぐに困った顔をして秋蘭を見る。

「秋蘭、任せた」

「やれやれ」

春蘭の言葉に苦笑を浮かべる秋蘭。彼女は一度咳払いをして。

「黄巾党の構成員は若者が中心で、散発的に暴力活動を行っているが……特に主張らしい主張はなく、現状で連中の目的は不明だ。また首領の張角も、旅芸人の女らしいという点以外は分かつていな」

「い」

「分からぬことだらけやなあ～」

真桜が難しい顔をしながら呟く。説明を聞きながら顎に手を当て、何かを考えていた凪が会話に入る。

「目的とは違うかもせんが……我々の村では、地元の盗賊団と合流して暴れていきました。陳留のあたりでは違うのですか？」

「同じよつなものよ。匪たちの村の例もあるよつこ、事態は悪い段階に移つたつある」

華林が言葉と共にため息を吐く。春蘭は華林の言葉に首を傾げる。

「悪い段階…………？ どつこいつ意味ですか？」

「I.IJの大部隊を見たでしょ？ ただバカ騒ぎをしているだけの鳥合の衆から、盗賊団やそれなりの指導者と結びついて組織としてまとまりつつあるのよ」

「…………ふむ？」

桂花の説明でも春蘭はよく分からなかつたようだ。蛮骨は欠伸を一つして。

「要するに……今までの様に、テメエが大声で抱えたくらいじゃ逃げ出さなくなるつて事だろ？」

蛮骨の言葉に華林が頷く。そして春蘭も分かつた様に頷く。

「ああ、成る程」

「…………ホントに分かつてゐるのかしら」

桂花の言葉にムツとした顔になる春蘭。

「秋蘭や季衣だけでは苦戦するところ」とだりへ。それくらいは分かるぞ。バカにするな！！」

「ともかく、一筋縄では行かなくなつたといつ事よ。ソレでソラから
にも味方が増えたのは幸いだつたけれど……これからの方の案、誰か
ある?」

華林の言葉にいち早く反応したのは桂花だ。

「この手の自然発生する暴徒を倒す定石としては、まず頭である張
角を倒し、組織の自然解体を狙つところですが……」

「張角つてどこにいるんですか?」

季衣の言葉に桂花も難しい顔をする。

「もともと旅芸人だつたせいもあつて正確な居所は掴めていない。
というより、むしろ我々の様に特定の拠点を持たず、各地を転々と
している可能性が高い」

「正に神出鬼没だな。どうやって攻めるんだ?」

ニヤニヤと楽しそうに蠍骨は華林に聞いかける。

「だからソレ、その相手を倒したとなれば、華琳様の名は一気に上
がるわ」

桂花が力強く声を上げる。

「すいませ~ん。軍議中、失礼しますな~」

すると、沙和がやつてきた。

「どうしたの、沙和。また黄巾党が出たの？」

華林の言葉に首を横に振る沙和。

「ううん、そうじゃなくてですね。街の人配つてた食糧が足りなくなっちゃったの。代わりに行軍用の糧食を配つていいいですか~」

沙和の言葉に華林は少し考えると。

「……桂花、糧食の余裕は？」

「数日分はあります……義勇軍が入った分の影響もありますし、ここで使い切つてしまつと長期に及ぶ行動が取れなくなりますね」

「……とはこえ、ここで出し渋れば騒ぎになりかねないか。いいわ、まず三日分で様子を見ましょ~」

「三日分ですね。分かりましたなの~」

華林の言葉に元気よく返事する沙和。

「桂花、軍議が終わつたら、糧食の補充を手配しておきなさい

「承知しました」

「すみません。我々の持つてきた糧食は、先程の戦闘であらかた焼かれてしまいまして……」

「おい、チビ軍師」

「何よ。野蛮人」

蛮骨に不機嫌な表情で振り向く桂花。

「黄巾党の奴等にも俺らと同じ思いさせてやりてえんだが」

蛮骨の言葉に華林が笑みを作る。

「成る程、考えたわね。蛮骨」

「いや？」

「どういう意味だ？」

よく分かつてない一人に蛮骨が簡単に説明する。

「アイツ等もそれなりの食糧を貯めている場所がある筈だろ？そこを襲うんだよ」

「成る程」

「お兄ちゃん、凄い」

そんな三人の会話を余所に華林は次々と指示を出す。

「蛮骨」

「ん？」

「沙和も偵察に出すから作戦の詳細を伝えておいて。蛮骨は沙和と一緒に行動しなさい。言いたしつべなんだだからちやんとやりなさいよ？」

「了」解

そういうて、蛮骨は外に出る。

?

「う～……偵察なの、緊張するの～」

「本当に緊張してんのか？」

沙和の間延びした声に蛮骨が首を傾げる。

「沙和。 一ついいか？」

「ん？ 大丈夫なの～。 答えられる範囲なら何でもいいの～。 あつ！」

そういうて、沙和は人差し指を立てて。

「胸の大きさは答えられないの～」

「チツ」

沙和に聞こえない様に小さく蛮骨は舌打ちする。そして蛮骨は頭を搔きながら。

「なんで、義勇軍に入つたんだ？」

沙和はどうみても、戦に進んで参加する様な性格には見えない。それは凪や真桜にも言える事だが、凪には確かに理由があり、それに乗つかつた形の真桜にもそれなりの覚悟がある。だが、沙和にはそれすら見えない。それが蛮骨の気になつた事である。沙和は蛮骨の問いかに少し考え、シレッとした態度で答える。

「凪ちゃんと真桜ちゃんが行くつて言つたから、私も来たの。凪ちゃんは全然御化粧をしないし、真桜ちゃんは絡繆の発明以外全然だらしないから、私がいないと駄目なの」

「それだけか？」

「うん。それだけの理由なの」

笑顔で元氣よく返事する沙和。蛮骨は可笑しそうに笑いながら。

「それなら後ろで補給役でも救護役でも良かつたんじゃねえか？」

「あ…………今まで隊長に言われるまで、それは思い付かなかつたの」

そういうて、頭を搔く沙和に蛮骨は笑つてしまつ。そして沙和は笑顔のまま。

「でも、凪ちゃんも真桜ちゃんもずっと一緒にだから、これからもずっと一緒になの」

「え？ ずっと一緒に……か

蛮骨は顔から笑みを無くし、沙和の言葉を呴きながら空を仰ぐ。沙和は友達想いの少女なのだろう。そう思つて蛮骨は笑みを作り、沙和の頭を撫でる。

「ふえっ？！」

いきなりの行動に素つ頓狂な声を上げる沙和。そして蛮骨は立ち上がり。

「んじゃ、あのチビ軍師のところ行くとするか

「つよーかいなの

？

偵察部隊が周辺へ散らばり、日が落ち始めた頃。春蘭の部隊が敵の物資集積場を見付けたとの報告が来た。だが、敵は物資の移動準備を既に始めており、早急に手を打たねば不味いとの事。

「御苦労様…………と言いたい所だけど、すぐに支度して。ここから撤収するわよ」

蛮骨達が戻る中、華林が本陣の撤収を始めていた。

「忙しないなあ。まあウチ等の立たされどる状況が状況やから、しやーないけど」

「秋蘭と季衣が居ねえけど、まだ帰つてねえみたいだな」

「ええ。でも待つ時間も惜しいのよ。現地で会流するより、遣いの者は出したわ」

華林の素早い対応に凪たち三人が舌を巻く。

「予備の糧食の方もここに置いておくわ。少しでも行軍を速めたいからね」

「けど、そのままだと取り合ってにならねえか?」

蛮骨の疑問に華林も気付き顎に手を当てる。

「……確かにそれなら、この場に兵を一、三人置いて行きましょう。それなら取り合いにはならない筈。よし。なら総員、可能な限り急いで撤収!!!!準備が終わつたら隊から出発しなさい!!!!!!」

?

華林の号令から数刻。本陣の撤収は速やかに終わり、物資集積場に向けて行軍を開始。本来なら半日掛かる道のりを僅か数刻で済ませることに成功。山奥にヒツソリと建つ、かなり古ぼけた砦に辿り着いた。

「既に廃棄された砦ね。良い場所を見つけたものだわ」

「敵の本隊は近くに現れた官軍を迎撃しに行っているようです。残る兵力は一万かと……」

「あいつ等にとっちゃ使い捨ての砦だ。大切にしようとは考えてねえだろ」

「蛮骨の言ひ通りだらうな。後一日経つていれば、ここはもぬけの殻だつた筈だ」

華琳が深くため息を吐く。

「厄介極まりないわね。それで秋蘭、こちらの戦力は?」

「義勇軍と併せて八千と少々です。向こうはこちらに気付いてませんし、荷物の搬出で手一杯のようです。今が絶好の好機かと……」

秋蘭の言葉に華琳は笑みを浮かべる。

「ならば、一気に攻め落とすわよ。敵に反撃の隙をとれる間も無く、ね

「……華琳様。私から一つ提案が」

桂花の言葉に華琳が「何?」と問い合わせる。

「はつ。戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を皆立てさせてから帰らせてください」

「えつ? それってどういふ事?」

「……この皆を落としたのが俺達だつて示すためだろ?」

桂花の提案に首を捻る季衣に蛮骨が笑みを浮かべて自分の推測を桂花に伝える。考えていたことを先に言われたのか少しだけ不機嫌になつた桂花が頷く。

「……成る程。黄巾の本隊と戦つているといつ官軍も狙いは此処。ならば敵を一掃したこの城に曹旗が立てられていれば……」

曹操の名は一気に高まる。それを聞いた皆が頷く。華琳は笑い。

「面白いわ。その案、採用しましょ?。軍旗を持ち帰つた者は厳罰よ」

言つや否や、軍議は誰が先に旗を立てるかで盛り上がる。その中で蛮骨は神妙な顔で皆を睨んでいる。

「どうした、蛮骨。お前がそんな顔をするとは珍しいな

そんな蛮骨が気になつたのか、秋蘭が声を掛ける。

「ん、ちょっとな。嫌な予感がするんだ」

「それは臆病風か？それとも勘か？」

「勘だ」

「そりか……」

蛮骨の言葉に秋蘭が頷く。

「まあ、取り敢えず慎重に動くよ、華琳をまことに伝えておく。お前も早めに布陣を済ませておけ」

そういうて、秋蘭は足早に自分の部隊に向かつ。蛮骨は秋蘭の後姿を横目で見送った後、もう一度艦を見る。

「…………氣のせい、か」

そうこうして、立ち上がり歩き出す。

第10話「部下」（後書き）

どうも、作者です。遅くなりました。今回は偵察部隊と皆攻略前で
す。次回は皆攻略戦。ご期待ください

第1-1話「未知の兵器」

「布陣はちやんと出来てるな……」

蛮骨の言葉に兵たちが勇ましく呼応する。それに満足した蛮骨が笑みを作る。

「隊長~」

すると、沙和たち三人がやつてくる。

「樂進隊並びに李典隊、干禁隊布陣完了しました」

「お~、『苦勞さん』

三人の報告に蛮骨が頷く。すると、真桜が思い出したように笑顔を作る。

「なあなあ、隊長。」の戦が終わったら宴を開くって話やけど

「ん?なんだ?」

蛮骨が聞き返すと真桜は満面の笑みで。

「その宴、隊長の奢りになんいかないかな~って

その言葉に少し、驚いた蛮骨だったが。

「そうだな。ただ、一つだけ条件があるぜ?」

「なんや？」

「たつた、三人じゃ宴も楽しくねえだろ？だから人数増やさねえか？勿論、俺の奢りで構わねえぜ？」

蛮骨がそうこうと、真桜は笑顔で了承した。どうやら残りの一人も問題ないようだ。

?

砦に銅鑼の音と兵士の雄叫びが聞こえたのを暗い場所で作業をしていた男はしつかりと聞いた。

「敵襲か。けど、本隊と戦っている奴等が来たんじゃ、早過ぎる。そもそも、アイツがやられる筈がねえ。だとすると、別働隊か。こつから旗が見えりや、いいんだが。止めとくか」

そういうと、男はそそくさと荷物を纏める。

「まあ、此処に置いてある分じゃ、士気は挫けても全滅は出来んだわ。なら、本隊と合流するか」

そういうと、男は歩き出す。すると、男を呼び止める声がした。振り向くと、そこには中年の男がいた。

「アンタ、本隊の方に行くのか？だったら俺も一緒に行くぜ？」

言いながら笑う男に。荷物を持つた男は腰に下げている瓢箪の中身を口に含む。

「へ？」

その口から炎を吐き出した。悲鳴を上げながら転げまわる男を見下ろしながら。

「悪いな。一人の方が色々とやりやすいんだよ」

そういうて、歩き出す。炎に照らされた坊主頭に布を巻いている男は軽い足取りで近くの小屋に行き、床下の隠し通路で鎧を脱出した。それを見たものは誰もいない。

?

「ハアアアツ！……！」

雄たけびと共に春蘭が敵の真っ只中へ飛び込み、剣を振るう。いきなりの奇襲で、敵の兵士たちは何も出来ずに絶命していく。

「つたく、相変わらずの猪だな」

春蘭の後ろにいる兵士を呆れの言葉と共に蛮龍の一線で薙ぎ払う。

ただ、蛮骨の表情は詰まらなさそうだ。

「む？…どうした、蛮骨。何時もの霸氣はどうした？」

「ん、ちょっとな。お前らもあまり深入りするな」

蛮骨は先に行こうとする三人に注意する。その態度に益々、首を傾げる春蘭。そこに秋蘭が合流した。

「こじらは終わった。後は此処だけだな」

「そりか。どうやら杞憂だった

」

そう言い切る前に蛮骨は春蘭と秋蘭を抱えて後ろに跳ぶ。

「蛮骨？..」

「いきなりなんだ！？」

一人の声も次の瞬間、閃光と爆音に飲み込まれる。

「ちつ……！嫌な予感はこれからよ。凪、沙和、真桜。無事か……！」

「は、はい……」

「あつ～、擦り傷できたの～」

「沙和もウチも大丈夫や～」

取り敢えず、近くにいた者達に被害がないのを確認して蛮骨は抱えている一人を下ろす。

「蛮骨、今のは何だ?」

秋蘭の問いに蛮骨は煙の向こうを睨みながら。

「砲筒だ」

「ほうづつ?」

春蘭が首を傾げる。

「俺もよく分かんねえんだ。確かなのは今の威力と遠くから攻撃できるってだけだ」

「爆発する矢のような物か。厄介だな」

秋蘭がそういうと、煙が晴れる。そして蛮骨の視線の先、塔のようないい場所に陣取っている数人の兵士が何か細長い筒を投げてくれる。

「秋蘭、あれ撃ち落せ!!--!」

「無茶を言つてくれ」

蛮骨の言葉に苦笑しながら矢を放つ。そして矢は筒に刺さり、蛮骨たちの前方で爆発する。

「今のは?」

「確かに爆雷筒だ。砲筒よりか使い勝手がいい奴だそうだ」

「確かに強い兵器だが」

そういうて、秋蘭が矢を放つ。放った矢は爆雷筒を投げようとした兵士の腕に刺さる。兵士はそのまま、自分の足元に爆雷筒を落としてしまう。そして残りの爆雷筒を巻き込んで大爆発を起こした。

「いとも、簡単に対処できてしまうのは私たちにとっては好都合だな」

そういうて、周りの者達に指示を出す。

?

後ろのほうで爆発の音を聞いた青年が足を止める。

「思ったより、足止めできなかつたみたいだな。相手が優秀なのか、残した奴らが無能なのか。……まあ、両方か」

そういうて、歩き始める。

「さて、本隊と合流後は何処に向かうかな」

楽しそうに口を歪め、本隊と合流するために青年は歩く。

?

城は落ちた。周辺に敵兵の姿は無い。敵守備隊もほぼ壊滅していた。

「よし、糧食庫に火を点ける。米一粒も残さず燃やすのだ……！」

「食料を持ち帰った者は厳罰に処する……心せよ……」

春蘭が号令を掛けると同時に、松明を持った兵が一列に並び、一斉に松明を投げる。たちまち糧食庫が燃え上がる。

「あ～あ……分かつとるけど、やっぱ勿体無いなあ。どんどんと燃えてくで～」

「ああ。だが、もし我々が糧食を持ち帰れば曹操様の名を落とすことになる」

「みゅう～……お腹を空かせた街の人達に、持つて帰つてあげたかったの」

三人が残念そうに呟く。これは桂花が事前に何度も警告していた事だ。下衆な賊徒から糧食を奪い、それで自分の腹を満たす。これほど霸道を歩もうと言つ曹操の名を落とす行為は無い。政治的には分かっているのだがやはり勿体ない、と思うのは当然だらう。

「お～い、お前うそつこと来～い！～！」

「「「あつー？」」「」

そんな彼女たちに蛮骨が声を掛ける。そして三人がある事を思い出し、走り出す。そんな蛮骨に華琳が近づく。

「ちゃんと部下の気配りも出来るじゃない」

「あ？何のことだ？俺は単にあいつらがぼやぼやしてるとから声掛けただけだ」

そういうて、欠伸をする。それを見た華琳は楽しそうに笑みを浮かべる。次いで、真剣な表情を作る。

「ねえ、蛮骨。貴方の報告にあった『砲筒』と『爆雷筒』だけど。貴方がいた場所では頻繁に使われていたの？」

華琳の言葉に蛮骨は額を指で搔きながら。

「それなりに金がある大名なら使ってたな。けど『砲筒』も『爆雷筒』も扱いとかが難しいらしくてな。好き好んで使う奴は少ねえよ」

「そう、安心した。あの火力は脅威以外の何者でもないから少し気になつてたのよ」

そういうて、肩を竦める華琳。それを横目で見ながら蛮骨は口を開く。

「けどな、黄巾の奴らに『アイツ』がいるんなら話は別だ」

「アイツ?」

華琳が聞いてくる。

「ああ、元『七人隊』の参謀だった。煉骨がいるなら話は別だ」「どんな奴なの? 参謀というからにはそれなりに学があると思つけど」

華琳の言葉に蛮骨が何処か懐かしむように喋る。

「ああ、煉骨は中々頭が良いぜ。けど、それだけじゃねえ。アイツは事『爆雷筒』や『砲筒』、火に関する事なら天才って言つてもいい」

蛮骨の言葉に華琳が驚く。蛮骨がこんなにも他人を持ち上げるのだ。かなりの実力者だと思われる。

「それは厄介ね。けど、貴方なら勝てるのでしょ?」

挑発するように聞いてくる華琳に蛮骨は鼻を鳴らす。

「つたりめーだ」

自信たっぷりに答える蛮骨に満足したのか華琳が頷く。

?

「ん？」

青年、煉骨は首になにか違和感を感じ、足を止める。

「…………氣のせいか。つたく、嫌なこと思い出しちまつたぜ」

そういうて、ため息を吐く。違和感を覚えた首の位置は『四魂の欠片』が埋め込まれていた場所だ。

「もし、この時代に大兄貴がいたら。勝てる訳ねえな」

何故なら此処は自分たちがいた時代より遙か昔。子供の頃、読んだことのある『三国志』の世界だからだ。それを知ったのは少し大きめの街に来た時、呉だの曹操だの劉備だのわいわい騒いでいた町人の話を聞いたときだ。ただ、違うのは煉骨が知識で知っていた人物が軒並み女性であるという点である。まあ、そんな些細な事は置いといて。今は蛮骨がこの時代にいる可能性だ。

「出来れば、味方であつて欲しいが、無理だろうな。ならさつわと降伏するか」

そう決めた瞬間、聞き慣れた音が聞こえてくる。

「あ、煉骨さん！――！」

次いで、元気一杯の声が聞こえる。見ると、少女が三人。動く異

形に乗つてやつてきた。

「あれ？他のみんなはどうしたんですか？」

少女の内の一人、桃色の髪の少女が不思議そうに聞いてくる。

「ん？ああ、さつきまで使つていた砦が攻撃受けてな。今頃は糧食諸共、炭になつてゐると思うぜ？」

「ちょっと！？何大変なことサラッと言つてんの！？一大事じゃない！！！！！」

少女の内の一人、氣の強そうな少女が煉骨に食つて掛かる。煉骨はそんな彼女にやんわりと。

「大丈夫だよ。一、二日もすりや、糧食も最低限揃つて。だからそんなに怒るなよ。可愛い顔が台無しだぜ？」

「かわつ？！」

煉骨が茶化すと少女は顔を赤くする。そして煉骨は異形の方へ向くと。

「お前が此処に居るつてことは官軍の方は終わつたみてえだな。流石、銀骨だ」

「ぎしそうしそう」

異形、銀骨は嬉しそうに低く唸る。

「んじゃ、残りの奴らが来るまでに新しい壇を探してくるわ

「気をつけてくださいね~」

少女の応援に手を振りながら煉骨は歩き出す。

「さて、次は何処の村を襲うかな」

まるで昼食を何処で食べるかといつも軽さで次の壇を探す煉骨だ
った。

?

城までの帰り道 華琳は蛮骨達を集め、簡単な会議を開いた。

「作戦は大成功でしたね!! 華琳さま」

「ええ、皆もご苦労様。不測な自体が起きた様だけどよくやつてくれたわ。特に風、真桜、沙和。初めての参戦で、見事な働きだったわ」

「ありがとうございますーー！」

「おおきにーー！」

「ありがとうなのーーー！」

そして華琳は視線を蛮骨に移した。

「蛮骨。隊長の貴方から見て、この娘達の働きはどうだった？」

そう問い合わせられ、蛮骨は彼女たちを見た後、ポリポリと頬を搔く。

「そうだな。初陣でこれなら文句ねえよ」

そういうって、笑う蛮骨。それを聞いた三人が嬉しそうに笑う。その様子を華琳、春蘭、秋蘭は微笑ましく見つめ、季衣は羨ましそうに、桂花は悔しそうに唸っている。

「さて、次は蛮骨の報告にあつた『砲筒』と『爆雷筒』だけど」

そういうって、華琳が切り出すとほぼ全員が真剣な表情になる。

「蛮骨によると、あの未知の兵器は蛮骨のいた地域で扱われていたらしいわ。ただ、扱いが難しいらしくて、好んで使つた者達は少なかつたみたいだけど」

「使つても他国に自慢するか、けん制に使うか位、という事か」

「そんな所でしょうね。問題は蛮骨が知つている人物が黄巾に組している場合。秋蘭、似顔絵を」

「はっ」

そういうって、秋蘭はある人物の絵を皆に見えるように見せる。

「男の名は煉骨。特徴は顔の紋様と服装ね。後、蛮骨以上に曲者だから見つけても一人で捕まえないよつて。いいわね」

華琳の言葉に皆が頷く。

「とはいえ、今回で」の辺りに面する奴らの動きを牽制する」といが出たはずだわ」

「はい。暫く大きな動きはないでしょう。ただ、元々本拠地を持たない連中のこと……」

「……今回の攻撃も、単なる時間稼ぎにしかならないと言つ事か

桂花と秋蘭の言葉に、華琳が小さく頷いた。

「でしううね。だから連中の動きが鈍くなつた今、奴らの本隊の動きを掴む必要があるわ」

「しかし、どうやって掴むのです？連中は本拠地が無いんですね？」

「地道に情報を集めて回るしかないでしょう。面倒だけどね

「はい。補給線が復活すれば、優先順位の高い順位に回していくるでしょう」

「はつ……あ、それで華琳さま。旗の件ですが

「皆には一層の努力奮闘を期待する……これで話は以上よ

春蘭の言葉に眞が思い出す。そうして眞が自分こそ立つといふに旗を挿した。と騒ぎ、秋蘭の中立的な意見により、季衣が一番だつた。その時、沙和と真桜が悔しがつていたが眞が宥める。眞骨はそれを見届けると外に出る。

「はあ～」

「どうした、眞骨。ため息など吐いて」

「きなり後ろから声を掛けられて眞骨が驚く。声を掛けたのは秋蘭だった。

「なにか分けあつのようだが。私たちには言えぬ事か？」

そういうて、秋蘭は眞骨の隣に立つ。眞骨は諦めたよつたため息を吐く

「眞骨は俺の部下だった」

「うん？『だつた』とはどういつてんだ？」

「裏切られたんだよ」

そういうて、空を見上げる。思い出すのは眞骨の最期と奴の喉を刺した感覚。

「そりか。だが、それならそこまで悩まないのではないか？逆にくも裏切つたな。といつて斬りかかるるじゃないか？」

「…………何でだらうな

もうじつて、頭を搔く。

「確かにアイツは俺を裏切った。それは今でも変わんねえ。けどよ、心のどつかで許しちまつてる俺がいるんだよ」

煉骨は蛮骨を裏切った。それは今も変わらない。だが、蛮骨は心の何処かでそれを許している。

「裏切られて怒っている俺と、もうアイツを許しちまつてる俺。どちらが俺の本心なのか分かんねえんだ」

そういうて、もつ一度ため息を吐く。それを聞いた秋蘭が顎に手を当てながら。

「分からぬいなら。会つてみればいいだらうへ。

「あ？」

蛮骨が秋蘭を見る。秋蘭は笑みを浮かべ。

「お前が頭をどれだけ捻っても答へなど出るわけないだらう？なら、戦場でその煉骨とやらと会つて、どちらが本心か確かめろ」

言われ、蛮骨は少しの間、呆けた後。笑い始める。

「そうだな。つたぐ、何を考へてるんだが。ていうかな、秋蘭。言い方にも限度があるだろ？

「事実だらう」

秋蘭が笑う。蛮骨も笑つ。そして蛮骨は何時もの表情に戻る。それを見た秋蘭は何処か安心したよう。

「何時も通りだな。やはりお前は悩みとは無縁ではないとな

「おいおい、俺だつて悩みくらこあるぜ？」

「ほう、それはどんな悩みだ？」

すっかり調子が戻つた蛮骨に秋蘭が聞く。蛮骨は少し悩み。

「そうだな。どうすればお前を俺の女に出来るか、とかな

蛮骨がそういふと、今度は秋蘭が呆ける。

「なんてな。冗談だよ」

そういうて、笑いながら歩いていく蛮骨。秋蘭は蛮骨の背中を見ながら。

「まったく、驚かしてくれる。しかし、蛮骨の女か。ふふ、悪くはないかもな」

小さく秋蘭が笑う。

第1-1話「未知の兵器」（後書き）

いつも、作者です。さあ、新しい七人隊。銀骨と煉骨の「J登場です！！！そして作者なりに考えた蛮骨の心情。次回は宴とちょっとしたギャグ回。お楽しみに

第1-2話「宴」

「隊長。ここの子供たちは？」

「ん？俺言わなかつたか？人数増えるつて」

「確かに言いましたが。これは多すぎませんか？」

凪はそういうて、目の前で遊んでいる子供たちを指差す。場所は陳留の街にある広場。そこで蛮骨は凪たち三名の歓迎会を開いていた。そして流石に四人だけじゃ、寂しいので、蛮骨が面倒みている子供たちを連れてきたのだ。

「あつ！？私のなの～！～取らないで～」

「へへ～ん。早い者勝ちだよ～」

「いいら、らんま～！～行儀悪いわよ～！～！」

「ふ～ん、好きな子が助平で困つてるんか？」

「やうなの。あたるつてば何時も街の女の子に声を掛けてばっかりで。この前なんて変なお爺さんと喋つてたし」

そんな声に顔を向けると沙和や真桜は子供たちと楽しく騒いでいる。

「大丈夫そうだな」

「やうですね。つて、隊長。毎晩から酒ばかりと思こますナビ」

凪が呆れたように注意する。蛮骨はその注意を無視しながら、チビチビと酒を飲んでいた。

「いいだろ、別に。今日の仕事は終わってんだから。大体、お前は固いんだよ」

「隊長や沙和たちが緩過ぎるんです。それに今日の仕事だって半分くじけ秋蘭さまに投げたじゃないですか」

その時の状況を思い出したのか、凪がため息を吐く。

「半分じゃねえ。全部だ

「最悪じやないですか!!!!!! 隊長はもつじじ将としての直覚をですね」

その後、凪は延々と蛮骨に説教をし始める。上司に説教をする部下。かなりシユールな光景だが。幸いなことにそれを聞いているのは蛮骨ただ一人である。残りは完全に宴を開いている。

「つたぐ、これじや折角の酒が不味くなる。凪もそう思つだ？』

「私も好きで説教をしている訳ではありません。全ては隊長の為です

蛮骨は物凄く嫌そうに顔を歪めた後、猪口を凪に渡す。いきなり猪口を手渡され、どうすれば迷つ。

「ま、お前も飲め

「び、びつも」

そういうて、猪口に注がれた酒を一気に煽る。それを見た蛮骨が口笛を吹く。

「いい飲みっぷつじゃねえか」

「ふ～、隊長。ややつて誤魔化したつもりでしがそつはなきませんよ」

やうじつて、また説教を始めるも凪の頬が赤い。どうやら、酒に弱いようだ。そして凪は勧められたものを拒まない性格のようだ。蛮骨は凪の説教の合間に酒を勧めた。

「れすから、たこちゅうまもう少しらせつべをですね～。あこてますか? らいちゅう～?」

「おお、聞こてるぜ」

呂律が回らなくなり、瞼も半分ほど閉じかけ、ふらふらと横に揺れる凪が面白いのか、楽しそうな笑みを浮かべる蛮骨。

「ひっ～」

「あれ、凪ちゃん顔赤いの」

「うわ、酒クサ!!!!!! 酔ってるんか?」

「わらひは酔つてませへん……」

やう叫ぶ凪だが、何処からどう見ても酔つてこる。

「もう、隊長。凪が面倒やからつて流石に口には駄目やで」

「わうか？ 静かになると思つたんだけどな」

真桜の注意に蛮骨は後頭部を搔きながら答える。

?

「凪たちを連れて何処へ行くかと思つていたら

「ただの歓迎会か」

蛮骨たちから離れた物陰で華琳と春蘭が呟く。

「それにしても桂花まで付いてくるなんて驚いたわ。絶対に来ない
と思つていたけど」

華琳が楽しそうに隣の物陰で蛮骨達を見ている桂花に声を掛ける。

「い、これはその………… そうです…… 蛮骨があの二人に淫らな事を
をしないか確認しに来ただけです……」

顔を赤くしながら答える桂花。

「ふふ、そうね。そういうとこしてあげるわ」

大方、一人で留守番は寂しいのだろう。

「それにしても、魏の将が揃って覗き見とは」

「それは言わない約束だぞ、秋蘭」

呆れながら秋蘭が呟くと春蘭が答える。

「その将の中には貴女も含まれてこるよつだけビ?」

「まあ、否定はしません」

華琳の言葉に秋蘭が苦笑する。ふと、秋蘭が周りを見渡す。

「季衣が見当たらぬが何処だ?」

「季衣なら蠍骨たちのほうにいるや」

春蘭の言葉に秋蘭が蠍骨たちのほうへ目を向ける。そこには季衣が額にバンダナを巻いた少年と一緒に遊んでいた。なにやら、バンダナの少年が指一本で岩を粉々に砕いて自慢したりしているのを見て、季衣が真似しようとしている。

「全く気付かなかつた。といつより、あの少年。じつやつて頭を粉々にしているんだ?」

秋蘭が疑問に思つも、誰も答えられない。

「つひやあつー?」

突然、桂花の悲鳴が上がる。見ると、少年が桂花のお尻を撫でていた。外見は頭の悪そうな、それでいて女好きそうな顔だ。

「な、何すんのよ。エロガキ!――!――!」

桂花が怒鳴りながら拳を振るつも、ひらりと避ける。そうして少年はさつさと蛮骨たちの方に向かう。

「待ちなさい。このガキ――!――!――!」

桂花が真っ赤な顔で追いかける。

「桂花まで行つたか

「とこいつより、蛮骨もこっちに気付いているな

「なら、行くとしまじょうか。此処で帰つて、後で聞かれるのも面倒だし」

そう、苦笑しながら華琳が歩き出す。それに春蘭と秋蘭が付いていく。

?

真桜が酔いつぶれた皿を介抱していると、見慣れた人達がやつてきた。

「おお、なんや皆勢揃いやな~」

真桜はそういって、笑顔になる。沙和も同じように笑みを作る。

「おお、一度良かった。誰も酌をしてくれなくて困ってたんだ」

「言ひとくけど。私はやらないわよ~」

華琳が最初に断る。春蘭も同じようして頷く。それを見た秋蘭がため息を吐きながら蛮骨の隣に座る。

「お、酌をしてくれんのか?」

「いや、お前が飲んでいる酒が気になつてな。まあ、気分しだいで酌をしてやるつ」

そういうで、勝手に蛮骨の手から酒を取り、沙和から渡された猪口に注ぎ、飲む。

「む~中々いい酒だな。高かつたのではないか?」

「ん?まあ、そこそこな。まあ、宴だからいろいろへん、細かい事なしだ」

そういうて、上機嫌に笑う。秋蘭も笑い、酒を持つ。

「ほら、酌をしてやる。流石にいい酒を飲ませてもうって、何もないのは不味いからな」

「おお、悪いな」

そういうて、秋蘭は蛮骨の猪口に酒を注ぐ。それを飲む蛮骨。

「くうーー！やつぱ一人で飲むより、断然いいやーーー！」

「そういうものか？」

苦笑しながら秋蘭が聞く。

「当たり前だろ？ 一人で寂しく飲むより、騒いで飲んだほうが美味いに決まってる」

「確かに否定は出来ないな」

その後、華琳たちが加わり、かなり盛り上がりがった。そして日が沈む頃には秋蘭、華琳、蛮骨以外が酔い潰れ、又は疲れて寝てしまい。どうするか話していた。

「どうするよ。コレ？」

「どうするって言つたって、ねえ？」

「やはり、全員運ぶしかないでしょう」

そういうと、秋蘭は春蘭を抱ぎ、季衣を小脇に抱える。意外と力

があることに蛮骨が驚く。それを見て華琳も泣々、桂花をおぶる。その時、華琳が楽しそうに笑っていたのを蛮骨は無視した。そして二人が去っていくのを見送った後、蛮骨は集まつた部下の二人と子供たちを見て、ため息を吐く。

「流石にこの人数は運べねえよな」

そう、考え。蛮骨は子供たちが寝泊りしている小屋に向かい。毛布をありつだけ持つてくる。そして皆を一箇所に集めて毛布を掛ける。

「片付けは明日でいいな」

そういうて、蛮骨は眠る。

第1-3話「下着泥棒」

「下着泥棒？」

「そりゃ。此處最近、被害が多いの」

「犯行は昼夜問わず、田舎堂々と盗んだり、夜闇に紛れて等、神出鬼没と来ている」

華琳と秋蘭の言葉を聞いて、蛮骨が頷く。

「成る程な。事情は分かった。けどよ、なんで俺が縛られてんだ？」

そういうて、蛮骨は華琳を睨む。いきなり部屋にやつてきた春蘭と秋蘭に縛られ、華琳の所に引き摺られて来たのだ。よく見ると全員の額に青筋が浮かんでいる。

「アンタは容疑者の一人に挙がってんの。だから一旦捕縛して置く。といつのが、私たちの総意よ」

「たかが、下着に大袈裟だな」

そういうて、鼻を鳴らした瞬間、その場の空気が変わる。

「たかが?今、貴方『たかが』って言ったのかしら?」

「お、おひ」

華琳の問い掛けに蛮骨が頷く。すると、華琳は蛮骨の胸倉を掴み、

凄い勢いで揺らしながら。

「アンタね！……下着がどれだけ女にとつて大切なのか分かつて
るのー？そりや、身なりに頼着しないアンタにとつては『たかが』
かもしけないけど私にとつては、いえ私たち女性にとつては死活問
題なの。それに私があの下着を手に入れるのにどれだけ苦労したか。
それを『たかが』ですって？！いい度胸してんじやない！……！」

ブンブン、と凄い勢いで蛮骨を揺らす華琳。そしてその言葉と共に
感しているのか、しきりに頷いている女性陣。華琳は荒い息を整え
ると蛮骨を睨む。

「いい？これから犯人の目撃情報を話すから、気が付いた事は全て、
包み隠さず私たちに報告なさい。いいわね？」

華琳がそういうて蛮骨を見るが、蛮骨は目を回していた。

「ちよっと、こんな大事なときに寝てるんじゃないわよ。起きなさ
い！……」

華琳はそういうこと、蛮骨が起きるまでは類を叩き続けた。

？

「ふ～む、昨日は少し危なかつたの～。まさか、盗んだ下着の持ち
主に曹操がいたとは」

そういうて、薄暗い場所でその人物は風呂敷を開く。

「ふむふむ。最近の女子はこんな物を付けるのか。ほほう、これはまた大胆な」

そういうて、その人物は色とりどりの下着を見ては嬉しそうに笑う。そしてそこに近づく人影が一つ。

「ふむ、あたるか」

そういうて、その人物が振り返ると、そこには蛮骨が面倒を見ている少年。あたるが立っていた。あたるはその人物を見て笑うと、背中に丸めた風呂敷を広げる。風呂敷の中身は下着である。

「どう、爺ちゃん。俺はこの桃の下着とか可愛いと思つんだけど」

「ふむ、それも捨てがたいが。やはりコレじやん」

そういうて、あたるより一回り小さい老人が手に持つていて下着を掲げる。その下着を見た、あたるが唸る。

「やはり女性は清楚な白が似合つ。しかし、この大人の色氣を誘つ黒も捨てがたいの～」

老人は右手に白、左手に黒の下着を持って、唸る。あたるも同じように右手に白と青の横縞模様、左手に水玉模様の下着を持っている。

?

「では今までの田撃証言を確認します」

秋蘭がそういうと、スラスラと犯人についての情報を挙げる。

『昼夜問わず、女性の（しかも若い女性）下着を盗んでいく』

『犯人は一人。どちらも小柄な男』

『下着を盗むと、高笑いを挙げるので分かりやすい』

そこまで聞いた蛮骨が声を上げる。

『そこまで分かつてんなら、なんで捕まえられねえんだよ？』

そういうと、秋蘭が苦笑しながら。

『捕まえようとした兵が悉く返り討ちに遭っているのだ。どうやら犯人のうち一人はかなりの武芸者らしい』

そういうて、秋蘭が犯人についての情報を述べる。すると、蛮骨の表情が変わる。

『どうした？ 蛮骨』

『いや、下着を盗んだとか、そういうのは正直どうでもいいんだが

「ううでもいい、といつ言葉に蛮骨に集中していた視線に殺意が追加される。それを軽く流す蛮骨。

「少しその泥棒野郎に興味が沸いたぜ。俺も手伝つかうこの縄解いてくれねえか？」

「却下。まだ貴方を犯人と繋がりが無い、と判断できないもの。貴方にできる事は早期解決の為に私たちに助言することよ」

華琳が据わった目で蛮骨を睨む。蛮骨はため息を吐く。

「分かったよ。んじゃ、俺が世話してるガキ共の中にあたるっていうガキがいるのは知ってるよな？」

「ええ、あの助平な子でしょ？」

そういって、華琳たちは気付く。

「アイツが犯人かどうかは知らねえが、手がかり位にはなるんじゃねえか？」

蛮骨がそうこうと、すぐさま春蘭が飛び出す。

「なあ、春蘭は場所知つてるのか？」

「知つてるでしょ？ けど、覚えているかどうか怪しいわね

そういうて華琳がため息を吐く。

「仕方ないわね。私たちも行きましょう。秋蘭は残つて蛮骨を見張つておいて」

「はつ」

秋蘭の返事を聞き、すぐに華琳達が動く。そして急に静かになり、秋蘭がため息を吐く。

「まつたく慌しい物だ」

「秋蘭」

「ん?」

秋蘭が蛮骨を見ると、蛮骨の表情は真剣そのものだ。今まで見た事が無かつた蛮骨の表情に少しだけ驚く。

「なんだ?」

「お前の下着、持つてくれねえか?」

その言葉を聞き終えた瞬間、雷光の如く矢を取り出し、矢を番え。蛮骨の額に狙いを定める。

「遺言はそれでいいんだな?」

「待て!!!!落着け秋蘭!!!!流石にその距離じゃ死ぬって
!!!!」

「はあ〜…………まさか、お前も犯人の仲間だったとは、信用して

いたのに残念だ。嗚呼、非常に残念だ」

「話を聞けって。俺は単に犯人を見つける為にだな」

「それと私の下着がどう繋がる?」

キリキリと音を立てながら秋蘭が尋ねる。蛮骨は冷や汗を流しながら。

「お前の下着を餌に犯人を誘き寄せるんだよ」

そういうと、秋蘭がハツとなる。

「そうか、その手があつたか!!--」

「おい、気付けよ」

蛮骨の言葉を無視して秋蘭がしきりに頷く。

「よし、ならばやってみるか」

そういうて、秋蘭は蛮骨の縄を解く。

「あん? もういいのか?」

「私は元々お前を信用していたよ。といつよつお前の場合、下着じやなくて本人を狙つような男だろ?」

「人を強姦みてえに言つんじゃねえ!!--」

その後、秋蘭は自分の下着を実際に洗い、見通しの良い場所に干す。そして秋蘭と蛮骨は近くの茂みに隠れ周りを警戒する。

「にしても、実際に洗わなくても良かつたんじゃないか？」

「此處最近、忙しくてな。丁度良かつたのだ」

少し頬を染めて答える秋蘭。それを横目で見ながら蛮骨は干されている下着を見る。

「にしても、お前見かけによらず結構派手な下着だな」

「何を見ているんだ。お前は」

ギリギリと蛮骨の首を絞める秋蘭。すると、下着に近づく人影が現れた。

「来たか」

人影は布で顔を隠してあるものの、体格は情報と合致してある。

「アイツか？」

「多分間違いないだろ？」

そういうと同時に人影が下着を手に取り高笑いをする。

「大当たりだな」

「ああ、そこの大外道！！！！大人しくすれば痛い目をしないですむ

ぞ……

そういうて、茂みから飛び出す秋蘭と蛮骨。

「ぬわつ！？ 騰であつたか。しかしこの八宝斎。そつ簡単に捕まらぬわ！……」

そういうて、逃げる犯人。

「待て！……！」

「ちつ……！」

秋蘭と蛮骨が犯人を追う。すばしつゝく、身体が小さいため、中々捕まえられない。しかも、逃げながら秋蘭の身体（主に胸や尻）を触るのだ。

「いい加減に！……往生しろ！……！」

そういうて、壁の一部を碎いて掴み、投げつける。壁の一部は犯人に当たり、犯人はゴロゴロと転がる。

「ようやく、止まりやがったか。まあ、覚悟は出来てんだろうな～」

指の骨を鳴らしながら近づく蛮骨。

「な、なんじやい！……なんじやい！……寄つてたかつて老人を甚振るとは。お主らには年上を労わる心は無いのか！……」

「やかましい！……テメエのせいで俺まで疑われたんだよ。その落

とし前仕合をせしやるかい。覚悟しな……。」

アツヒツヒテ、拳を繰り出す。蛮骨にハ宝斎は懐からキセルを取り出す。

「ふうむ、最近の若いのはおつかないの~」

そういうった瞬間、蛮骨はハ宝斎の後ろにある壁に背中からぶつかつていた。

「じ、爺!!--テメ!何しやがった?」

すぐに起き上がりハ宝斎を警戒する蛮骨。

「ふむ、さて何をしたのかの?--最近、物忘れが酷くて覚えておらんのだ」

「」の爺。いい度胸してるじゃねえか!!--。」

叫び、拳を繰り出すもひりりと避けられる。そしてハ宝斎は蛮骨に背を向け走り出す。その先には秋蘭がいた。

「お嬢ちゃん!!--ぼへつ?--」

秋蘭の胸に飛び込んだハ宝斎の顔を飛び膝蹴りで迎撃した後、無言で持っていた荒縄で雁字搦めにする。

「戻るぞ、蛮骨」

「お、おひ

無表情の秋蘭に蛮骨は冷や汗を流す。

「胸とか尻触られたくれえで大袈裟だな

そういうと、同時に蛮骨の額に向けて、矢が飛んできた。それを咄嗟に避ける。

「次は当てる」

そういうて、蛮骨を冷ややかに見つめる秋蘭。これからは秋蘭を本氣で怒らせないようこじょう、と本氣で考える蛮骨であった。

第1-3話「下着泥棒」（後書き）

今回は皆大好き（かな？）八宝斎とあたるの下着泥棒編でした。この二人つて意外と波長合いそうですね？では次回の更新をお楽しみに

第14話「幕間」

「隊長……起きてください……隊長……」

訓練所を見渡せる場所で嵐は昼夜を決め込んでいる蛮骨を起こしていた。

「何だよ？昼夜の邪魔すんじゃねえよ。てか、今は軍議中だろ？サボつてんじゃねえよ」

「毎回、軍議をサボつている隊長にだけは言われたくないません。華琳さまから伝言です。これから数名の兵を連れて情報収集せよ、と」

アリスヒト、蛮骨は軽く伸びをする。

「つたぐ、面倒な仕事寄越しやがって。俺がそんな器用な事出来ると思つてゐるのか？」

「まあ、思つてませんでしきうね。でも、他に手が空いている人がいませんでしたし。何より、桂花さまのいい提案ですか？」

桂花、その名前が出た瞬間、蛮骨が鼻を鳴らす。

「大方、チビ軍師の嫌がらせだな」

「どうします？情報収集だけなら私だけでも問題ありませんが」

嵐がそういうと、蛮骨は頭を掻きながら立ち上がる。

「いや、俺も行く。また秋蘭の小言を聞くのは嫌だからな」

「私の小言はいいんですか?」

「風がやつこいつと、蛮骨は笑つて。

「いや、お前の小言聞くと何か眠たくなつてよ

「私の小言の最中に寝ていいのはそのせいですか!……はあ、
今度秋蘭さまに隊長が眠くならなこような説教の仕方を教えてもら
おお」

「おおい、風。案内してくれ!」

「あ、はい……!」

何時の間にか歩き出していた蛮骨に向かつて風は走り出す。

?

あの後、数名の部下を連れて蛮骨と風は郊外の森に来ていた。森の中では邪魔なのか、はたまたやる気が無いのか、蛮骨は蛮龍を持つていない。

「ん?」

蛮骨は何かに気付くと、近くの茂みに隠れ、後ろにいる凪たちに手で指示する。凪たちはそれに従う。何故だか、この蛮骨という男。秋蘭でも知らない指示の出し方をするのだ。だが、それが意外と分かりやすい。何処で覚えたのか凪が聞いた所。

「ん? 気付いてたら出来てたぜ?」

だそうだ。それを聞いて長らく傭兵の頭を務めていたので自然に出来た仕草だと凪は推測する。まあ、そんな思考は放つて置いて、凪は蛮骨の視線の先へと目を向ける。

「あれは……」

黄色の布を頭に巻いた男が数人歩いていた。その男たちに気付かれないと、凪は蛮骨に近づき。

「どうしますか?」

「決まつてんだろ?」

そういうて、蛮骨は近くにあつた石を男たちの背後にある茂みに投げる。ガサガサと音を立て、男たちの視線がその茂みに集まる。

「フツ……」

その瞬間、男たちとの距離を詰めた蛮骨が拳を繰り出し、男たちを氣絶させた。正に一瞬の出来事だった。

「隊長つて、意外とそんな器用な事も出来るんですね」

「意外は余計だ」

凪が感心して咳くとそれにすかさず答える蛮骨。そしてそんな一人の会話を尻田に気絶している男たちを縛っている兵士がある物を見つけた。

「蛮骨殿。これを」

「ん? なんだこれ、地図と手紙か?」

渡された紙を広げ、蛮骨は咳く。凪はそれを横で見て。

「どうやら、集合場所の連絡みたいですね。だとしたら、こいつ等は連絡兵」

「取り敢えず、華琳に報告だな」

?

がやがやと黄色い布を頭に巻いた男たちが騒いでいる。その顔はどれも今か今かと何かを期待した表情で、前方の舞台を見ている。そしてその集団の一角、舞台から見えやすい場所に法被を着込んだ集団がいた。その法被も何かに呑わせているのか三色に分かれている。その一番前、まるで戦に望む武将の様な面持ちで舞台を眺める男性がいた。

「煉骨隊長！――準備できました」

「ふむ、前回よりも速いな。まあ、当然か」

紫の法被を着た男性の声に煉骨は笑みを浮かべ、そう呟く。そして後ろを振り返る。

「いいか――――今回も俺たちの声援で舞台を盛り上げる――――！全員、心して掛け――――！」

その言葉に男たちが雄叫びを上げる。それを聞いて満足そうに頷く煉骨。

「煉骨隊長。宜しいですか？」

「なんだ？ん？……お前は確か、先日入ったばかりの

「はい。煉骨隊長、お聞きしたい事があります」

「言つてみろ」

煉骨の言葉に男が喋る。

「何故、張角様や張梁様だけでなく、張宝様まで応援するのですか？」「ひつひつては何ですが、彼女はその、色々と小さいじゃないですか」

その言葉に煉骨の表情が変わる。その表情は怒りではなくまるで無知な輩に向けるような哀れみの視線だった。

「馬鹿野郎」

「へ？」

尚も言葉を続けようとする男を煉骨の言葉が遮る。煉骨は拳を握りながら。

「確かに……地和は天和や人和より胸が小さい。ああ、小さすぎる……！だが、その何が悪い……それはアイツが一番分かっている。そしてアイツはそれを改善させようと日夜、胸を大きくする努力をしている……そこがいいじゃないか……胸がペツタンコだからこそ、日々の成長度合いが分かりやすい……！そこが可愛いじゃないか……天和の毎日笑顔全開も良い！！！人和の思慮深そうに見えて、実は乙女な所も良い！！！そして地和は皆の見えない所で可愛い努力をする所がとても良い……！」

魂の叫びだつた。煉骨は目を瞑り、涙を流しながら叫ぶ。

「そんな事も分からぬ奴は男として失格だ。女の魅力ってのはな、胸だけじゃねえんだよ！！！顔だけじゃねえんだよ！！！！自分の身体に対する姿勢がその女の魅力を左右するんだ！！！！！」

その叫びを聞いた男たちは涙を流しながら頷く。

「隊長…………俺が間違つてました…………」

「人間、誰しも間違いはある。だが、その間違いに気付けたのは幸運だ！！！！さあ、その間違いを正すために力の限り、魂の限り…………彼女たちを応援するぞ…………」

その言葉に先程よりも大きな雄叫びが沸きあがつた！――――！

第1-4話「幕間」（後書き）

いつも、作者です。まず、更新が遅れたのと煉骨のキャラが変わりすぎたのにお詫びを申し上げます。単に普通の煉骨じゃ、恋姫の世界に合わせ難く、こんな形になりました。不快になられた方、申し訳ありませんでした。今回は偵察の話と煉骨兄貴の魂の言葉です。この作品における煉骨のキャラ設定は『年下好き』です。参考キャラは中の人繋がり。スキンヘッドで口リコンな高校生です。あのキャラは結構お気に入りです。では次回をお楽しみに

第1-5話「圧倒・殲滅・再会」

蛮骨は隊列を組んでいる兵達を無表情に眺めていた。

「此處にいたのか。珍しいな、お前が昼寝をしないなんて」

声の方向に蛮骨が田だけ向けると秋蘭が立っていた。蛮骨は不機嫌に鼻を鳴らして。

「昼寝の最中に矢が飛んで来た」

「ほお、物騒な話だ。もしや敵かもしけんな」

クスクスと笑いながら秋蘭が答える。それを聞きながら蛮骨の米神に青筋が入る。

「お前、わざとやってねえか？」

「ああ、何のことかな？」

首を傾げてはぐらかす秋蘭に蛮骨はため息を吐く。蛮骨は肩の蛮竜を担ぎ直して。

「んで、何の用だ？」

「確認だ。お前の役割は覚えているな？」

秋蘭の言葉に蛮骨は手をヒラヒラと振つて。

『忘れるわけねえだろ？』敵本隊に蛮骨部隊が先駆け、本陣まで駆け抜けろ』簡単すぎて忘れる理由がねえよ

蛮骨の言葉に秋蘭は苦笑する。

「まったく、我等が軍師は無茶苦茶な事を言う物だ」

「その無茶を俺に押し付けた華琳も相当だぜ？」

そういうと、秋蘭は困ったように笑う。

「それよりも、だ

蜜骨は身体ごと振り返り

お前が奇襲部隊の指揮なんて出来んのか?」

挑発的な笑みの蜜骨に秋蘭は笑つて、

安心した。接湯がこの形で出来た。

秋蘭の言葉に奎骨は鼻を鳴らす。

「そんじゃあ、俺は先に行くとするか？」

一ああ、華琳様から伝言だ

—あん？華琳から？

蛮骨の言葉に秋蘭は頷き。

「『派手に暴れなさい』だそうだ」

それを聞いた蛮骨は楽しそうに笑みを浮かべ。

「いいね。んじゃ、『期待通りに暴れるとするか』

そういうて、意氣揚々と自分の部隊に向かつ蛮骨。秋蘭はそれを眺め。

「姉者もやつだが、あそこまで童のように笑みを浮かべられるとほな」

呴く。すると、秋蘭の近くに一人の兵が近づき、何か報告する。秋蘭は頷き、後ろを振り返る。そこには簡素な武器と目立たない防具に身を固めた数十名の兵士だった。

「よし、これより我らは敵本陣へと向かう……。」

秋蘭の号令に兵士たちが呼応する。

?

「うう、緊張してきたの~」

「そんな時は深呼吸や。ほら、吸って~、吐いて~」

「」なんんで大丈夫か？」

沙和と真桜の会話を横で聞きながら蛮骨はため息と共に言葉を吐き出す。蛮骨の隣にいる凪は苦笑しながらも。

「仕方ありませんよ。それなりに戦いを知っているとはいって、大きな戦いはこれが初めてなんですから」

「まあ、それもそうだな」

そういうにて、頭を搔く蛮骨。そんな蛮骨を羨ましそうに凪が見つめる。

「どうかしたのか？」

「え？ああ、いえ隊長は凄いな、と。」んな状況でも緊張しないなんて

「緊張はしてるぞ」

「え？ー？」

「これひくひいだけどな」

そういうて、驚く凪に蛮骨は親指と人差し指で小さな隙間を作る。それを見た凪が小さく笑う。

「やっぱり隊長は凄いです」

「当たり前だ。他の野郎共と一緒にすんじゃねえよ」

そういうて、蛮骨は視線を前に送る。凪も視線を前に向けるとそのまま見渡す限りの大軍勢が迫っていた。

「さて、注文通り派手に暴れるとするか。お前ら、準備はいいな！――！」

蛮骨の叫びに彼の部隊が呼応する。同時に開戦の銅鑼が鳴り響く。

？

秋蘭は後方で銅鑼の音を聞いた。

「始まつたな」

そう呟き、兵士たちに田と手で指示を出す。指示を受けた兵たちは頷き、田の前の廃れた小屋を見る。情報では張角三姉妹はこの小屋にいるといつ。

「よし、配置に付け」

小さく指示を出す。兵たちは頷き、音を出さないよう気を付けて入り口に向かう。秋蘭も入り口に近づく。そこで違和感に気が付く。

「静かすぎる」

そう呟き、小屋の窓から中をそつと覗く。だが、周りの木々や日の位置で中の全容が掴めない。更に中から人の生活では嗅ぎ慣れない臭いがする。

「これは」

ふと、この臭いに覚えがある。つい最近、この臭いを嗅いだ覚えがある。そして兵士の一人が小屋の扉を開けようとする。そして秋蘭は臭いが何なのか気付く。これは……火薬！？

「待て！……扉を開けるな！……」

「え？」

突然の大声に兵士が間抜けな声を上げる。同時に扉が僅かに開く。同時に何か細い物が切れる音がした。

「つー？」

本能的にその場を飛び退いた秋蘭が見た物は小屋が赤く輝いた瞬間と耳を貫く轟音だった。

？

「ん?」「

森の中、煉骨は背後を見る。背後の森では僅かに煙が上がっている。

「異小屋だな。まさか、こんな早いとは。コマイツは早めに逃げる算段でも練つておくかな」

そうこうして、煉骨は顎に手を当てる。

「あひ、あひあひ」

「ん? どうした銀骨」

煉骨の足場。巨大な鉄の塊である銀骨が声を上げる。そして煉骨は前を見る。

「成る程。やつぱいやがったか」

色々しせうに煉骨は咳くと、銀骨の肩部分に装備されている長こ筒を操作する。

「ぎしそしそし」

「そつか、お前は知らないんだつたな。まあ、今は敵同士なんだ。仕方ねえだろ?」

その言葉と共に煉骨は手元の取つ手を引く。

「取り敢えず、これで死んでくれ、大兄貴」

煉骨の言葉を搔き消すような轟音が響き、風を切つて、目標。敵陣の中で戦っている蛮骨に向かつて真っ直ぐ飛んでいく。

?

「チツ！！」

舌打ちした蛮骨は勢い良く蛮竜を地面に打ち付ける。大地が捲れ、即席の壁になる。更に蛮骨は後ろに跳んだ。同時に即席の壁が轟音と共に砕け散る。

「隊長！！」

「無事だよ！……風、散れ！……固まつてたら死ぬぞ！……」

それだけ言つと、蛮骨は砲弾が飛んできた場所に向かつ。

「やつぱりか」

人の山を文字通り蹴散らし、進むとそこには見知った顔があつた。

「久しづりじやねえか。ええ？銀骨、煉骨！……」

蛮骨が吼える。その先にいる煉骨は心底嫌そつに顔を歪めると。

「一度と会こたくなかったけどな」

「どうじつて、煉骨は銀骨から降つる。

「どうしたよ。何時ものお前なら銀骨の上から戦つのが普通だろ？」

「それもどうなんだがよ。どうも、銀骨の野郎がテメエとやつあつたくねえんだとよ」

ナツコって、煉骨は背中に両手を回す。

「まあ、なんだ。俺たちの大将の為に死んでくれねえか？」

「へえ？ 俺に奇襲しようとして死んだのに。真正面からやつあつて勝てると思ってんのか？」

蛮骨が言つたが、煉骨は無言。蛮骨はため息を吐くと、蛮龍を地面に突き立てる。

「テメエ、何のつもりだ？」

「決まつてんだろ？ テメエに蛮龍は必要ねえ。つていうか、テメエの事だ。蛮龍の長所も短所も分かりきってるから、どうやって勝負してんだろう？」

蛮骨がそう告げると煉骨の顔が歪む。

「わい、と。会つてみりや分かるつて言われたが、確かにそうだな

「何のことだ？」

「Jリーグの話だ。気にすんな」

そうこうして、両手の拳を胸の前で合わせる。

「さうてど、久しぶりに兄弟喧嘩と洒落込むか、ええ？ 煉骨！……！」

叫び、蛮骨が走り出す。

第1-5話「圧倒・殲滅・再会」（後書き）

いつも作者です。今回は一回、二三までです。次回は煉骨と蛮骨の勝負。ご期待ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6985q/>

蛮骨と霸道を歩む者たち

2011年8月7日22時57分発行